

## 身体感覚教育論の視点からの地域文化資源の教材開発 —信州上田別所三頭獅子舞を素材に—

### Development of Teaching Materials of Local Cultural Resources from the Viewpoint of Physical Sensory Education Focusing on the Case of the Shinto Ritual “Bessyo Mikasira-Jishi” Preservation Association

松 田 和 彦\*

Kazuhiko MATSUDA

#### はじめに —今こそ、和の身体技法の再興を—

本論の目的は、別所三頭獅子舞発生当初の動きを探り、和の身体技法テキストとしての教材開発である。和の身体技法の再興のために、身体技法を体現する日本の伝統的郷土芸能の学校教育現場におけるカリキュラム化を目指して筆者はすでに次のように指摘した。「身体の動きを外面的ではなく内観的な感覚に基づいて捉え、和の身体技法の伝承を推進し、さらには指導者不足を補う手立ての一環としても、和の身体技法をカリキュラム化するための基礎的な研究を行う必要がある。」<sup>1)</sup>このような問題意識に基づいて筆者は、すでに下之郷三頭獅子を対象として伝統的な郷土芸能の動作は、筆者の定義する9つの和の身体技法、①軸、②丹田、③沈み、④ひねり・半身、⑤撞木・撞木の感覚、⑥ねじり、⑦踵を返す、⑧肩幅、⑨ナンバ)の要素から構成されていることを説明してきた。

本論では、地域文化資源を身体感覚教育論の視点から、この下之郷三頭獅子の分析を踏まえ、さらに発展させて教材開発をするという課題を設定したが、それは、以下のような問題意識によるものである。すなわち、現在の情報化社会における生活様式は効率性の追求が重要視され、交通ではリアモーター

カーの実用化が間近であり、通信においてもより速度の速い第5世代(5G)の携帯電話が開発されるなど利便性は向上している。第一次産業においても例外ではなく、人工知能により無人で操作できる機械の開発実用化も進んでいる。その一方で大人、子どもを問わず身体を多面的全面的に使う機会が少なくなっていることは否めない。斎藤(2000)は「鉄道網や自動車が発達する以前は、小学生が何キロも歩いて学校に通うことは珍しいことではなかった。子どもたちが歩いて遊びに行く範囲もまた非常に広がった。(中略)数キロ離れた池に遊びに行き、歩いて帰ってくることは日常なことであった。」という<sup>2)</sup>。日常的な歩く、走るという人間の基本的な行為や、体を使つての労働作業は呼吸との関係も深く身体技法獲得の基本でもある。木下(2000)は「私の歩行術は両脚を左右または前後にできるだけ広げると丹田養成に役立つところから出発している。これに調息法を加えている。」という<sup>3)</sup>。ところが現在の社会環境では様々な安全面を考慮すると広範囲に渡って歩いて行く事は難しく、人間が当たり前に行ってきた動作で培ってきた身体感覚を身につける機会や環境は確実に減少している。それゆえに体の理にかなった「和の身体技法」を教育現場である学

\*長野大学非常勤講師、自由の森学園中学校・高等学校非常勤講師、身体感覚教育研究所・所長

校や伝統的郷土芸能の保存会・講習会の場などで指導者が伝えることは必要であり、今若い世代に身体感覚としての和の身体技法を伝えることは急務でもある。斎藤（2000）は「身体感覚は文化として認められにくいので、そのうち何かが衰退していったとしても、気づかれることが少なく、また意識的な伝承がはかられることも少ない。時代の推移にしたがって、身体感覚もまた変化を余儀なくされるのは当然である。しかし、自己の〈中心感覚〉や他者との〈距離感〉といった基本的な感覚を支えている伝統的な身体感覚が、文化として認められることもなくいたずらに衰退するに任せるのはいかにも忍びない。身体感覚を意識的に伝承することに関して、あまり悠長に構えている状況ではないと私は考える。現在の七〇代、八〇代以上の人たちは、数百年以上に渡る伝統的な身体感覚の蓄積を身にしみこませている。その人たちの持っている、文化遺産としての身体感覚と技を若い世代に伝承していくには、ある程度急がなければならない。」という<sup>4)</sup>。

以上の問題意識にもとづいて、本論は別所三頭獅子を素材に、身体感覚教育論の視点から9つの和の身体技法に立脚した別所三頭獅子発生当初の動きを探り、和の身体技法テキストとしての教材開発を目的として設定した。

本論が別所三頭獅子を素材として教材開発することにした理由は、下之郷三頭獅子に比べ複雑な動作が少なく、繰り返しの動きが多いことから身体技法を指導しやすく、理解もされやすいと思われる。また別所三頭獅子は、別所温泉の岳の幟行事（以下『岳の幟』と記す。）の中で披露される<sup>5)</sup>。さらに岳の幟

は2019年で516回目を迎え、平成9年12月4日に文化庁から、国の選択無形文化財<sup>6)</sup>に指定されるなど歴史的にも価値が高いことである。（写真1）<sup>7)</sup>筆者は、すでに保存会である「岳の幟伝承者の会 岳の会」（以下『岳の会』と記す。）との連携もできている。

## 別所三頭獅子の概要とその動きを作り出す前提条件

すでに指摘されているように、三頭獅子の全国分布数は、1400以上に及び、長野県では、廃絶や中断も含め25箇所<sup>8)</sup>の所在を確認することができる<sup>8)</sup>。また、小林（2006）によると「上田地区には、常田・房山・上室賀・下室賀・保野・別所・東前山・下之郷に三頭獅子が伝えられ」という<sup>9)</sup>。以下に示す図1<sup>10)</sup>は、上田地区三頭獅子分布図である。



図1 上田地区三頭獅子分布図

別所三頭獅子は現在「岳の会」によって伝承され岳の幟当日、別所温泉街4箇所<sup>11)</sup>で披露され最後に別所神社へ奉納されている。以下にまとめる内容は、岳の幟保存会会長・別所神社総代長 松崎良人氏<sup>11)</sup>、岳の幟保存会会員 増沢孝徳氏<sup>12)</sup> 同会会員 宮原章典氏<sup>13)</sup>、岳の会会長 竹内博敏氏<sup>14)</sup>、同会会員 山極透氏<sup>15)</sup> からの聞き取り調査によって得られた知見である。筆者は2017年と2019年の岳の幟の祭礼に参加し別所三頭獅子も見学しており、以下にその内容をまとめる<sup>16)</sup>。



写真1: 選取書記録作成等の処置を講ずべき無形文化財指定選取書

## 1. 名称

◎別所三頭獅子（べっしょ みかしらじし）

『上田市の文化財』（1999）には「別所の獅子踊り」という記述がある<sup>17)</sup>。小林（2006）によると「別所の獅子舞」という<sup>18)</sup>。増沢孝徳氏によると「呼び方は色々ある。シシマイ、サントウジシ、ミカシラジシ等、上田には何箇所か同じ形態の踊りがあるので、別所のミカシラジシですね。」という<sup>19)</sup>。宮原章典氏によると「いろいろですね。」という<sup>20)</sup>。松崎良人氏によると「岳の幟は、平成9年12月4日に文化庁から、国の選択無形文化財に指定されています。岳の幟の行事には、別所ミカシラジシ、ささら踊りも含まれています。」という<sup>21)</sup>。竹内博敏氏によると「別所ではタノクサジシという人もいますが、『岳の会』ではミカシラジシで統一しています。他の地域でも三頭獅子はあるので別所ミカシラジシがいいと思います。」という<sup>22)</sup>。総合的に判断すると特別に正式名称はないようであり、本論においては、岳の会会長の竹内博敏氏の見解に従い別所三頭獅子（ベッショ ミカシラジシ）として表記する。

## 2. 所在地

◎長野県 上田市 別所温泉地区

## 3. 時期

◎2019年においては7月14日（日）

齋藤（1976）は「もと『ノボリ』と『三頭獅子およびササラ踊り』は別々に行われていた。後者は本来、祇園祭りの出し物であったものを、昭和9年以降氏子総代であった著者の父、齋藤房雄の提案により合わせて行うようになった。」という<sup>23)</sup>。『岳の幟の祭礼調査報告書』（1982）には「獅子面が大幅破損したので、昭和9年になって資金を募集し、三頭の獅子面を新調した、その際、岳の幟と祇園祭の期日が接近しているので、この二祭を合わせて同月日に施工したのがはじまりで、以来今日に到るまで毎年同時に行うのが恒例になってしまった。」という記述がある<sup>24)</sup>。『上田市の文化財』（1999）には「塩田平ではもともと祇園祭に出されて来た竜型の三頭獅子と子どもが踊るささら踊りとがセットになっているところが多くありました。傷んだ獅子面を新調した昭和九年以降、岳の幟と祇園祭の期日が近いことから岳の幟・三頭獅子・ささら踊りを一緒に行うことにして、それがしきたりになりました。祭日は例年七月十五日

（近年その日に近い日曜に変更）。という記述がある<sup>25)</sup>。小林（2006）は、「江戸時代には岳の幟が、六月十五日に行われていたと記されていますが、明治の改暦によって七月十五日になり、最近では七月十五日に近い日曜日に行われています。（中略）現在岳の幟と獅子舞・ささら踊りは、一緒に『岳の幟の祭り』として行われていますが、昭和初期の頃までは獅子舞とささら踊りが岳の幟とは別に祇園祭の出し物として行われていました。（中略）岳の幟と祇園祭が接近していたので、二つの祭り行事を合わせて行うようになりました。」と言う<sup>26)</sup>。

『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』（2013）には「今日では、七月十五日に近い日曜日」という記述がある<sup>27)</sup>。増沢孝徳氏によると「獅子頭の新調に合わせ、昭和9年から神輿は祇園祭で行い、三頭獅子は岳の幟で舞うようにした。」という<sup>28)</sup>。竹内博敏氏によると「元々祇園祭で踊っていましたが、岳の幟に近い事と、2つの祭りを別々に行うには個々の負担が大きい事と、地域の祭りだったのが観光的要素が大きくなったことも岳の幟で踊るようになった要因です。現在は7月15日に近い第2か第3の日曜日にこなっていますが、私の記憶では7月15日に行わなくなったのは40年くらい前からだったと思います。」という<sup>29)</sup>。祇園祭について『岳の幟の祭礼調査報告書』には「祇園祭のはじまりは、昔頂上の祠の向きを決めるため、牛と馬で競争させ、早く頂上に着いた村の方に向けることにして、夫神は馬、別所は牛で挙行したところ別所の牛の方が早く頂上に着いたので別所村の方に向けるようになった。夫神の馬は中腹の水飲み場までしか行けなかったので、そこに大明神祠を祀ったという。また夫神岳を中心に猪が多くなり、人里出て作物を荒らし、百姓は困窮した。その上疫病が流行した。そこで相談の上、京都の八坂神社を勧請（かんじょう）し7月15日に、ささら踊り、三頭獅子舞を奉納したところ疫病もなおり、猪の被害もなくなった。これが祇園祭の始まりで、この時以来この祭が行われて来たという。」という記述がある<sup>30)</sup>。総合的に判断すると、元々は祇園祭での出し物であったようだが近年は岳の幟と一緒に行われており、2019年は7月14日日曜日に行われた。

## 4. 場所・披露数・奉納数

◎場 所：上手・院内・大湯・分去・別所神社

◎披露数：上手で1回、院内で1回、大湯で1回、分

去で1回の計4回

◎奉納数：別所神社神殿前で1回 披露数、奉納数を合わせ計5回

『上田市誌 文化財編 (27)』(1999)には「支度を整えて日影公民館に待機をしていた三頭獅子とささら踊りの一行がそれに加わり、行列をつくり温泉街を一巡します。長寿園前・石湯前・大湯前・相染閣前の4箇所(中略)最後は別所神社の神前に捧げて終わります。」という記述がある<sup>31)</sup>。増沢孝徳氏によると「上手集会所前で踊っていたこともあるが、狭くなったため上手の踊り場に変更。分去の持ち場である相染閣前で踊っていた時期も長かった。別所温泉駅やあいそめの湯でも踊っていた。」という<sup>32)</sup>。竹内博敏氏によると「基本的に上手、院内、大湯、分去の4箇所披露して別所神社で奉納していますが、その時々地区の事情に合わせ、上手地区内では日陰の集会所前・上松旅館の駐車場・長寿園の外庭、分去地区では、二幸前・相染閣駐車場・あいそめの湯駐車場・あいそめの湯芝生と披露場所の変更はありました。それから今年(2019)は雨が激しく上手で踊れませんでした、こんなことは私の記憶では、ここ30～40年間で3回目です。」という<sup>33)</sup>。

総合的に判断すると、その時々地区の事情によって各区内での場所の変更はあったようだが、近年は上手(上手の踊り場)・院内(石湯前)・大湯(大湯前)・分去(観光駐車場)で各1回の計4回の披露と、別所神社で1回奉納され披露数、奉納数を合わせ計5回演じている。なお2019年においては雨の影響で上手での披露は中止であった<sup>34)</sup>。

## 5. 由来

◎不 明

笹原(2001)は「青木村夫神・上田市別所・同市前山・丸子町尾野沢・長門町有坂では、かつては雨乞いとしても行われていた。」という<sup>35)</sup>。小林(2006)は「上田地区には、常田・房山・上室賀・下室賀・保野・別所・東前山・下之郷に三頭獅子が伝えられ、常田・房山・上室賀・下室賀・保野・別所の三頭獅子は天正十一年(1583)436年前真田昌幸が上田城を築城した地固め式にも奉納されたと伝えられています。」という<sup>36)</sup>。宮原章典氏によると「別所という真田の小さな地にそれほど力があつたとは考えにくく、上田城築城に呼ばれることはないのではとも思うが、別所三頭獅子の古記録はほとんどなく、

住民の言い伝えのみで、はっきりしたことは言えない。」という<sup>37)</sup>。竹内博敏氏によると「上田城築城の際に獅子舞が参加したかどうかは不明ですが、大湯の横の介護施設には真田の殿様の休み処があつたという記録もあり、お忍びで湯にきていたと考えれば真田との関係は深く、上田城築城で踊った可能性は高いと思います。それから、三頭獅子とささら踊りはセットですが、ささら踊りの唄の中に、あの山に雨が降りそうな雲が立っている、というような歌詞があることから考えると、雨乞いとリンクしているとも考えられます。」という<sup>38)</sup>。総合的に判断すると、上田城は、1583年(天正11年)真田昌幸によって築城されており、江戸幕府成立が1603年であることから、別所三頭獅子は江戸時代以前から存在すると推察され、その過程において盛衰があつたことは類推されるが、祇園祭での悪霊退散、岳の幟における雨乞いと五穀豊穡を旨として、別所地区での伝承と振興で現在に至っているようだ。ただそれぞれに信憑性はあるがその由来書の所在は不明であり確かなことは言えない。

## 6. 内容

### 6.1. 組織

◎「岳の会」

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「大正9年に時の氏子総代房齋藤雄氏が寄付募集の趣意書に下記のように記載している。

#### 古式の三頭獅子復興寄付趣意書 記

三百五十有余年の往時、上田城築城に際し、我が別所の邑より出仕せりと伝えられる郷土の芸能の粹なる三頭獅子は其後明治初年に舞たるを古老の記憶に止め、その衰亡を惜しまれたが、去る大正十一年の頃、村内有力者により、復興を見たり、然るにその後は是に舞わざる十有余年、又滅亡の道を辿らんとす、痛惜の限りなり。是に於て再び復興せんとす。村内大方の氏子諸彦、其の郷封社宝の為に一大努力奉仕を賜らんことを謹んで乞ふ次第なり。

昭和九年四月

氏子総代  
村 長

かくして昭和九年に獅子面が新調、復興されたのである。」という記述がある<sup>39)</sup>。さらに『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「獅子の復活は大正末の小



学校の改築の折だった。」という記述もある<sup>40)</sup>。小林(2006)は「その衰亡を惜しまれたが、去る大正十一年の頃、村内有力者により、復興を見たり……」と記されています。」という<sup>41)</sup>。増沢孝徳氏によると「昭和9年に、村の資金と寄付金で一度壊れた獅子頭を直しました。その頃に岳の会ができ、三頭獅子とささら踊りを継承してきたのでは。」という<sup>42)</sup>。竹内博敏氏によると「別所では岳の会で通っていますが、正式には『岳の幟伝承者の会 岳の会』です。岳の幟保存会には幟だけでなく三頭獅子とささら踊りも含まれていますから、三頭獅子伝承者にとささら踊りの居場所がなくなります。ですから岳の会は三頭獅子とささら踊りを担当しているというわけです。組織的には岳の幟保存会に属していますが、経済的には別経営ですから実際には独立した団体です。岳の会は私に三頭獅子を指導してくれた福寿荘の小福田正喜さんが、祭りの前だけの練習では忘れてしまうと、毎月1回集まろうと考え約36年前に作りました。」という<sup>43)</sup>。総合的に判断すると、一度は衰退していた三頭獅子は、大正末から昭和初期にかけて復興をしたようであり、現在は「岳の会」において伝承されており、岳の会の設立は竹内氏の証言によると約36年前のようである。

## 6.2. 別所三頭獅子の構成

◎神主・大ぬさ(氏子総代)・獅子三頭(男獅子二頭、女獅子一頭) 笛(人数特にきまりなし)・太鼓(締二丁・打手二人)・警護(人数にきまりなし)・うちわ(特に持ち役なし)

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「神主、大ぬさ 氏子総代、獅子 三頭(男獅子二頭・女獅子一頭)、笛 人数特にきまりなし、太鼓 締二丁・打手二人、警護 人数特にきまりなし 現在5人、うちわ 特に持ち役なし」という記述がある<sup>44)</sup>。竹内博敏氏によると『岳の幟の祭礼調査報告書』の通りです。」という<sup>45)</sup>。総合的に判断すると2019年度は、神主・大ぬさ(氏子総代)・獅子三頭(男獅子二頭、女獅子一頭) 笛(人数特にきまりなし)・太鼓(締二丁・打手二人)・警護(人数にきまりなし)・うちわ(特に持ち役なし)である<sup>46)</sup>。

## 6.3. 岳の幟における別所三頭獅子行列順(図2)<sup>47)</sup>

◎2019年度は、①先導車・②保存会幟旗・③国選無形民俗文化財の旗・④先達(警護)・⑤宮司・

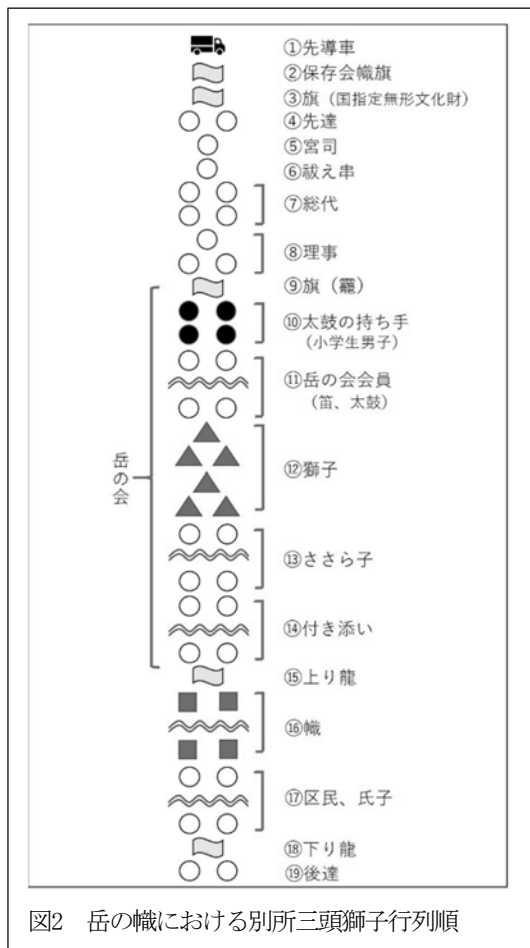


図2 岳の幟における別所三頭獅子行列順

⑥祓い串・⑦総代・⑧理事・⑨オカミの旗・⑩小学生男子・⑪笛 太鼓 岳の会会員・⑫獅子 岳の会会員・⑬ささら子・⑭付き添い・⑮上り龍の旗(青の布)・⑯幟・⑰区民 氏子・⑱下り龍の旗(赤い布)・⑲後達(警護)

『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』(2013)には「男神岳の山頂から下った幟の行列は上手地区の硯石から先達・宮司・三頭獅子・ささら子・幟の順に行列をつくり、」という記述がある<sup>48)</sup>。

松崎良人氏によると「大雑把には先達・宮司・三頭獅子・ささら子・幟の順です。詳しくは2019年度の実施要領をみてください。」という<sup>49)</sup>。『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼(515年前発祥) 実施要領』(2019)には「行列並び順・職種及び担当者 ①先導車

広報 旅館組合長 観光協会 特別委員 ②保存会幟旗

- 湯端地区会長（次年度山頂当番）
- ③国選択無形民俗文化財の旗  
東町地区会長（次年度山頂当番）
- ④先達  
院内神社委員より2名（警護）（次年度山頂当番）
- ⑤宮司  
宮司
- ⑥祓い串  
総代（御練りが選出地区内を通過中の総代）
- ⑦総代  
上手総代・院内総代・大湯総代・分去総代
- ⑧理事  
自治会連合会長・水利組合長・観光協会会長
- ⑨オカミの旗  
分去自治会長・大湯自治会長
- ⑩小学生男子  
太鼓の持ち手 4名
- ⑪岳の会会員  
笛 太鼓 約 10名
- ⑫獅子  
岳の会会員 6名
- ⑬ささら子  
小学生女子 2年生～6年生 予定 40名
- ⑭付き添い  
育成会役員・保護者
- ⑮上り龍の旗（青の布）  
新道地区会長（次年度山頂当番）
- ⑯幟  
約60本の予定
- ⑰区民氏子  
大勢練り歩き
- ⑱下り龍の旗（赤い布）  
西大湯地区会長（次年度山頂当番）
- ⑲後達  
西分去地区会長・北分去地区会長（警護）  
（次年度山頂当番）
- という記述がある<sup>50)</sup>。竹内博敏氏によると『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼（515年前発祥）実施要領』の通りです。』という<sup>51)</sup>。総合的に判断すると、2019年度は、現在岳の幟を含む別所三頭獅子の行列順は①先導車・②保存会幟旗・③国選択無形民俗文化財の旗・④先達（警護）・⑤宮司・⑥祓い串・⑦総代・⑧理事・⑨オカミの旗・⑩小学生男子・⑪笛 太鼓 岳の会会員・⑫獅子 岳の会会員・

⑬ささら子・⑭付き添い・⑮上り龍の旗（青の布）・⑯幟・⑰区民氏子・⑱下り龍の旗（赤い布）・⑲後達（警護）の行列順である。

別所三頭獅子の行列順は⑪・⑫であり、詳しくは①神主・②大ぬさ（氏子総代）・③三頭（お獅子二頭、女獅子一頭）・④笛・⑤太鼓打手・⑥警護・⑦うちわの順であった。（⑩の太鼓は別所三頭獅子でも使用された。）<sup>52)</sup>

#### 6.4. 行列行程

◎2019年度は、上手（日影、上手の踊り場）→院内（石湯前）→大湯（大湯前）→分去（観光駐車場）→別所神社（境内）

『上田市誌 民族編（3）』（2002）には「別所温泉でも、（中略）当日の早朝から日影公民館に待機の獅子舞の一行が、夫神岳から降る幟の行列と合流して温泉街を練ります。途中、上手・院内・大湯・分去の所定の4か所で演舞を重ね、最後は別所神社に奉納します。」という記述がある<sup>53)</sup>。『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』（2013）には「上手・院内・大湯・分去と巡行します。行列は途中、上手の踊り場・石湯前・大湯前・あいそめの湯で獅子舞・ささら踊りを披露します。最後に別所神社についた一行は拝殿にて神事を執り行い、ささら踊りと獅子舞を奉納します。」という記述がある<sup>54)</sup>。『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼（515年前発祥）実施要領』（2019）には「（前略）8時15分 日影（中略）8時55分 石湯前（中略）10時25分 大湯前（中略）11時25分 観光駐車場（中略）11時25分 神社境内（後略）」という記述がある<sup>55)</sup>。増沢孝徳氏によると「今は上手・院内・大湯・分去・別所神社と回っているが、最初は山から降りて来て七草〔ホテル七草の湯のこと-筆者補足〕あたりでやっていた。途中から大湯辺りも回り出した。各地区の人が見にくる場所でやる必要がある。」という<sup>56)</sup>。竹内博敏氏によると『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼（515年前発祥）実施要領』の通りです。』という<sup>57)</sup>。総合的に判断すると、各地区の披露場所は各地区の事情により変更はあるものの、2019年度は別所4地区の上手→院内→大湯→分去→の順番で各地区をまわり最後別所神社であった<sup>58)</sup>。

6.5. 扮装・採り物 (図3) <sup>59)</sup>

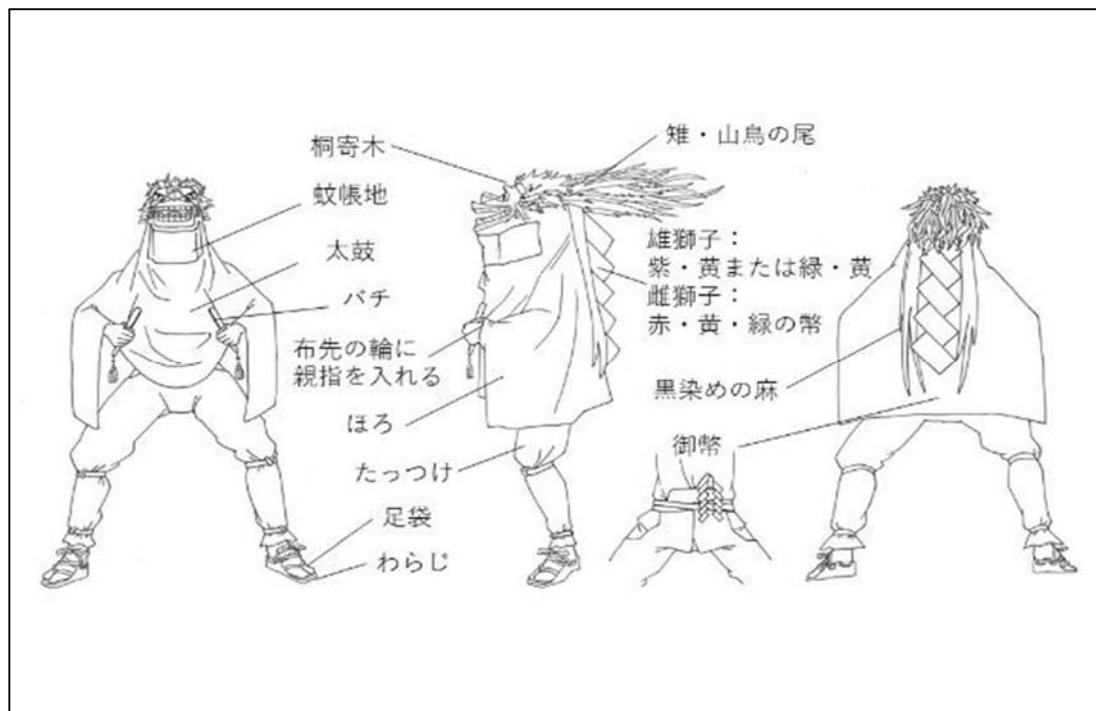


図3 扮装・採り物図解



写真2 獅子頭雄



写真4 獅子頭雄



写真3 獅子頭雄



写真5 獅子頭雄



写真6 獅子頭雌



写真7 獅子頭雌



写真8 襦袢



写真9 股引



写真10 袴雄



写真11 袴雌

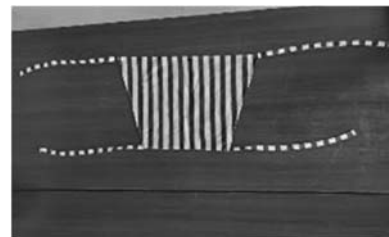


写真12 手甲、脚絆 雄

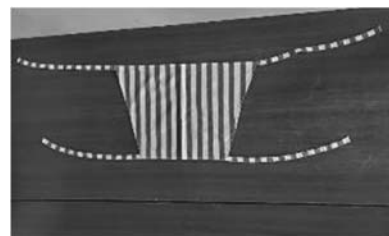


写真13 手甲、脚絆 雌



写真14 古太鼓 桐



写真17 新太鼓



写真15 古太鼓 桐



写真18 撥



写真16 新太古



写真19 草鞋

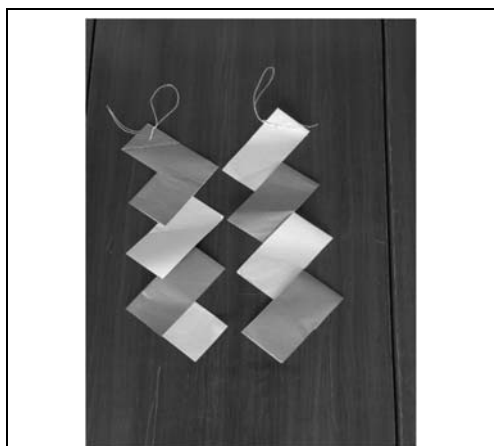


写真20 頭についている幣



写真21 頭についている幣

## ◎2019年度使用

- ・獅子頭雄(写真2～5)・獅子頭雌(写真6・7)<sup>(60)</sup>
- ・白の広袖襦袢(写真8)<sup>(61)</sup>
- ・白の股引(写真9)<sup>(62)</sup>
- ・雄獅子用達付袴(写真10)<sup>(63)</sup>
- ・雌獅子用達付袴(写真11)<sup>(64)</sup>
- ・雄獅子用手甲、脚絆(写真12)<sup>(65)</sup>
- ・雌獅子用手甲、脚絆(写真13)<sup>(66)</sup>
- ・桶胴太鼓(写真14～17)<sup>(67)</sup>
- ・太鼓の撥(写真18)<sup>(68)</sup>
- ・草鞋(写真19)<sup>(69)</sup>
- ・獅子頭の弊(写真20・21)<sup>(70)</sup>
- ・御幣<sup>(71)</sup>。

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「装束

## 男獅子

頭 桐寄木 角釘止 胡粉地 上塗緑 眉黒 隅朱 口朱 口開く 舌朱 齒金 眼金 眼球動く仕掛けあり 瞳黒 耳裏朱 後に黒染麻紫・白三枚重ねの幣をつける 上部に雉・山鳥の尾羽 つけぎわに五色の紙こまかく切ってつける ほろ青 前面蚊帳地を張った窓ぬく 獅子毛白で描く 頭の横に小幣 紙白 白元結でしぼる 座は竹あみ あたりの部分を白の木綿でまく

達付 紺・白縦縞

足袋 白に青の水玉散し

わらじ

手甲 達付と共ざれ 甲の部分なし

着付 なし

太鼓 胴長の小形のものを腰につける

撥 二本 柄に細く切った紙をつける

## 女獅子

頭 形 男獅子に同じ 上塗朱 眉黒 隅なし 口朱 口開く 舌朱 齒金 眼金 動く仕掛けあり 瞳黒 麻・羽男獅子に同じ 幣赤・白三枚重ね ほろ錆朱

足袋 白地に赤水玉散らし 他は男獅子に同じ」という記述がある<sup>(72)</sup>。『上田市誌 文化財編(27)』(1999)には「竜頭青面の雄獅子二頭と竜頭赤面の雌獅子一頭が、」という記述がある<sup>(73)</sup>。竹内博敏氏によると「男獅子も女獅子も頭は龍型です。身に着ける太鼓は桐の胴に革を張っていて音も出ます。新しく増やした太鼓の胴は桐ではありません。足袋も水玉は揃えにくいので白足袋にしています。あとは岳の幟の祭礼調査報告書とだいたい同じですね。」という<sup>(74)</sup>。総合的に判断すると、足袋の柄模様を水玉から白に変更されていることと、撥の柄に紙から雄獅子は紫、雌獅子は赤の房に変わったこと以外は、現状とほぼ同じ扮装が伝承されていると言える。

## 6.6 演目順

## ◎2019年度実施演目

- ①道行き・②振り込み・③舞い込み・④舞いの部・⑤かじり・⑥岡崎・⑦ほねなし

小林 (2006) によると「獅子舞の演目には、道行き・振り込み・舞い込み・舞いの部・かじり・岡崎・ほねなしの七つの振りがあり、ほねなしは別所神社の境内だけで舞われています。」という<sup>75)</sup>。『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982) には「道行き・ふり込み・まい込み・まいの部・かじり・岡崎・ほねなし以上の七つの振りからなる。この内『ほねなし』は現在別所神社の境内でのみ行われる。」という記述がある<sup>76)</sup> 竹内博敏氏によると「演目は、道行き・ふり込み・まい込み・まいの部・かじり・岡崎・ほねなしの7つで、ほねなしは別所神社のみで行われます。どの場所も最後は道行きで退場します。」という<sup>77)</sup>。総合的に判断すると、2019年度は道行き・ふり込み・まい込み・まいの部・かじり・岡崎の順で上手・院内・大湯・分去の4箇所披露し、別所神社において、ほねなしを加えた全演目を奉納した<sup>78)</sup>。

## 6.7 各演目の意味

### ◎不明

竹内博敏氏によると「諸説ありますが、

- 1) 道行き : 神の化身である三頭獅子の降臨。
- 2) ふり込み : 大地を清める。

- 3) まい込み : 地固めと整地を行い、結界を張る。
- 4) まいの部 : 胸の太鼓を打ち鳴らし悪霊退散の祈願。
- 5) かじり : 仕事区切りの夏祭り。
- 6) 岡崎 : 五穀豊穡を祈願し、天の神への霖雨創生の祈りと雨乞い。
- 7) ほねなし : 天・地の神々へと感謝と祈り。と推測されます。口伝のみで正式なものはありません。また、ほねなしという演目名等は別所で新たに付けたものかもしれませんね。」という<sup>79)</sup>。演目の意味付けをしている記述は見当たらず、各演目の意味が古来より伝承されてきたかは不明である<sup>80)</sup>。さらに、竹内博敏氏は「岳の幟の例祭で三頭獅子を踊っている最中に、晴れた日でも雨が降ることはよくあります。今年 (2019年) は夕

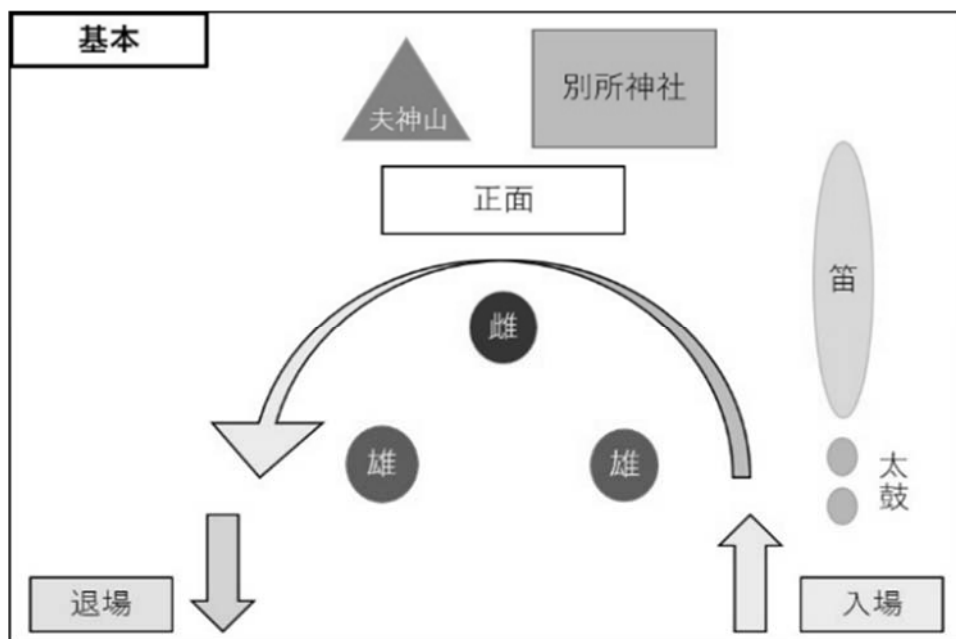


図4 基本の配置

立がすごかったですね。神のご加護だと思います。」という<sup>81)</sup>。

## 6.8 踊りの配置

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「本来常に夫神岳にむかって踊られるものであったというが、今は観光地としての事情もあって必ずしも守られていない。」という記述がある<sup>82)</sup>。竹内博敏氏によると、図を描きながら「岳の幟の祭礼調査報告書は間違っていますね。別所神社では神殿が正面ですが、基本的には夫神山を正面にして踊ります。私がお場で正面を決めます。決してお客様が多い方を正面することはありません。入退場は正面に向かって下手から入場、下手へ退場です。お囃子は図4<sup>83)</sup>が基本の配置ですが、場所によって変更します。」という<sup>84)</sup>。

総合的に判断すると2019年度は、上手(日影上手の踊り場)は図5<sup>85)</sup>・院内(石湯前)は図6<sup>86)</sup>・大湯(大湯前)は図7<sup>87)</sup>・分去(観光駐車場)は図8<sup>88)</sup>・別所神社(境内)は図9<sup>89)</sup>であった<sup>90)</sup>。

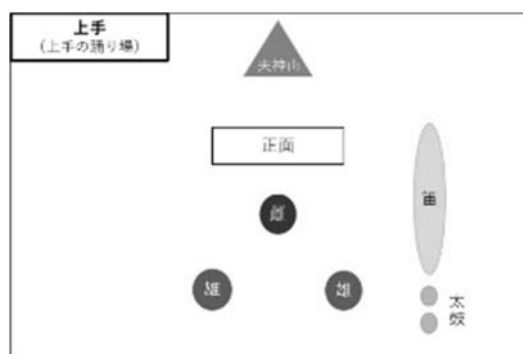


図5 上手(日影、上手の踊り場)

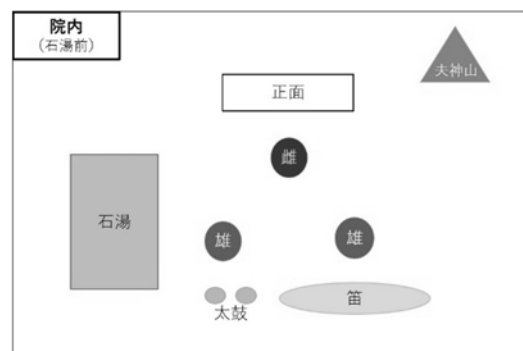


図6 院内(石湯前)

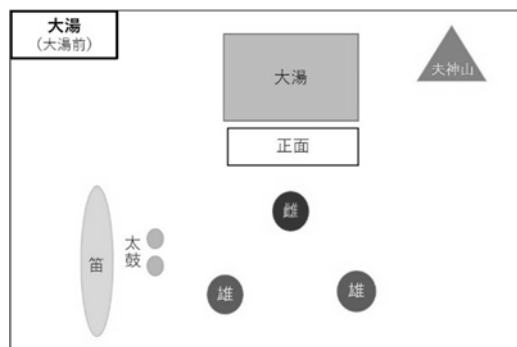


図7 大湯(大湯前)

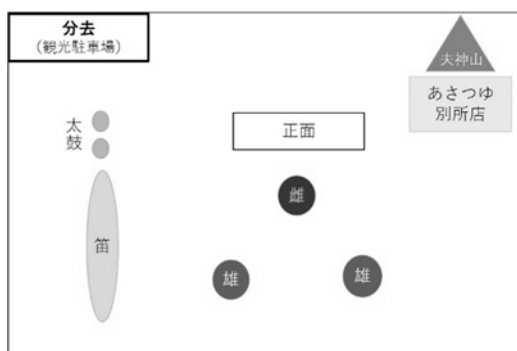


図8 分去(観光駐車場)

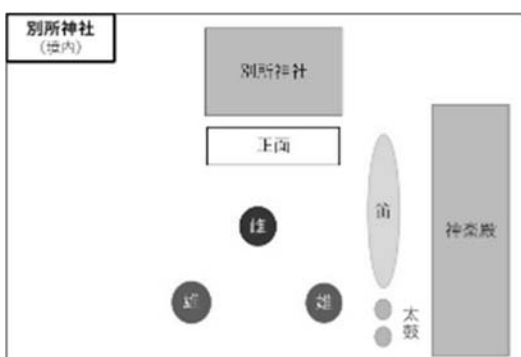


図9 別所神社(境内)

## 6.9 芸能(別所神社)

◎夫神山・別所神社を正面に下手から入退場をし、各獅子が正三角形の頂点になりながら、左周りに演技する。

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「獅子は



三頭が正三角形の頂点に位置することになる。(中略)なお進行は常に左回りである。」という記述がある<sup>91)</sup>。竹内博敏氏によると「正面に対し右側に奥から笛、太鼓の順でお囃子が並ぶ。お囃子の前を男獅子、女獅子、男獅子の順で左回りに入場します。

①道行き・②振り込み・③舞い込み・④舞いの部・⑤かじり・⑥岡崎・⑦ほねなしまで基本的に左回りで踊り進めます。⑤のかじりで女獅子が回りながら後ろに抜け、男獅子同士が向かい合う形をとり、正面を底辺にした三角形になる。この時女獅子は踊りません。⑥岡崎から女獅子も加わり正面に対し、女獅子を頂点とした正三角形になり女獅子、男獅子とも正面を向き踊る。⑦ほねなしも同様に踊り納める。

①道行きで退場しますが、退場も左回りです。」という<sup>92)</sup>。筆者見学时も男神山・別所神社を正面に下手から入退場をし、各獅子が正三角形であった。総合的に判断すると、男神山・別所神社を正面に下手から入退場をし、各獅子が正三角形の頂点になりながら、左周りに演技すると言える。

## 6.10 芸風

◎粋(いき)

『岳の幟の祭礼調査報告書』には「粋なる三頭獅子」という記述がある<sup>93)</sup>。竹内博敏氏によると「動作がシンプルなだけに、粋に格好よくが大事です。」という<sup>94)</sup>。総合的に判断すると、近年の芸風は粋と表現することができる。

## 6.11 音楽

◎2019年度の笛・太鼓

縮太鼓2・篠笛11

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「笛の人数は便宜上多少の増減があるようで本当は3人だったという程度の伝承にとどまっている。」という記述がある<sup>95)</sup>。さらに『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)には「笛・・・4人(古い記事では3人) 太鼓・・・2人」という記述もある<sup>96)</sup>。竹内博敏氏によると「太鼓2と笛で構成されています。太鼓は2です。笛は3あれば大丈夫ですが、今は特に決まりはありません。」という<sup>97)</sup>。総合的に判断すると、笛の人数にばらつきがあり古記録に残っておらず何時頃からの伝承であったか確かではないが、2019年度は太鼓2と篠笛11であった<sup>98)</sup>。

## 6.12 楽譜

◎次ページの楽譜(P22～P34)は、2017年の別所神社奉納時の演奏を採譜し楽譜化したものである<sup>99)</sup>。

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)にも楽譜が記載されているが<sup>100)</sup>、それ以前の記録は見当たらず、1982年時点での演奏を楽譜化したものと推測される。竹内博敏氏によると「だいたい岳の幟の祭礼調査報告書の楽譜で演奏していますが、今はほとんど耳コピですね。楽譜通りではないと思いますが。」という<sup>101)</sup>。管見ではあるが筆者の経験から、篠笛は奏者によって演技者の動きや演奏場所によって基本のリズムを即興で脚色することが多い。今回その両方を比較しながらテキスト化の視点から総合的に判断想像し、脚色であろうと考えられる部分を省いた楽譜化を試み掲載した。

## 6.13 歌詞・詞章

◎無し

『⑦上田市の文化財 上田市誌 文化財編』(1999)には、「別所を含めた塩田川西地区では三頭獅子に唄はつかず、集団で華やかさを盛り上げるささら踊りで歌われています。」という記述がある<sup>102)</sup>。竹内博敏氏によると「振り込みの演技で、太鼓2人がオーラと言いますが、唄はないですね。」という<sup>103)</sup>。筆者見学时<sup>104)</sup>もオーラの合いの手は入ったが唄はなかった。総合的に判断すると、現状で唄は入らないが、発祥時に唄があったかどうかは不明である。

## 6.14 儀式・典礼

◎清払い・奉納報告祭

竹内博敏氏によると「踊りを披露する4地区において神主が清払いを行います。別所神社においては神主が奉納方告祭をします。」という<sup>105)</sup>。総合的に判断すると、現状では清払い・奉納報告祭という性格をもっているようだ。

## 6.15 古記録・文献

◎詳しくは不明

小林(2006)は「三頭獅子は天正十一年(1583)436年前真田昌幸が上田城を築城した地固め式にも奉納されたと伝えられています。」という<sup>106)</sup>。竹内博敏氏によると「やっぱり口伝だけですかね。古記録を探したけれど見つかりませんね。あるのは岳の幟の祭礼調査報告書だけです。」という<sup>107)</sup>。総合的に判断

## 別所三頭獅子 道行き

笛

太鼓

1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採譜

## 別所三頭獅子 ふり込み

笛

太鼓

「オーラ」

1太鼓のふちを打つ

6

10

14

1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採譜

The musical score for 'The Wind' consists of two systems. The first system is in 3/4 time and features a treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature of 3/4. The melody is written in a simple, folk-like style. The second system is in 2/4 time and features a bass clef with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature of 2/4. The melody is written in a simple, folk-like style. The score is presented in a clean, black and white format.

注:「オーラ」は太鼓手による掛け声

## 別所三頭獅子 まい込み

Flute (flute icon) and Taiko (taiko icon) notation. The score is in 2/4 time. The melody is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#). The drum line is written in a simplified notation with 'x' marks for hits. The first system includes the vocalization 「オーラ」 above the drum line. The second system starts with a measure rest for the flute. The third system starts with a measure rest for the flute. The fourth system includes first, second, and third endings for the melody.

注:「オーラ」は太鼓手による掛け声

1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採譜

## 別所三頭獅子 まいの部

The musical score is written for a vocal line (flute) and a drum line (Taiko). The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 2/4. The melody is in a traditional Japanese style, featuring eighth and sixteenth notes. The drum line provides a rhythmic accompaniment with various patterns and rests.

1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採譜

## 別所三頭獅子 かじり

笛

太鼓

5

11

17

1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採譜

The musical score consists of four systems, each with a flute part (flute icon) and a drum part (drum icon). The flute part is written in treble clef with a key signature of one flat (B-flat). The drum part is written in a simplified notation with 'x' marks for hits and rests for silence.

System 1: The flute part starts with a melodic line. The drum part has a pattern of hits and rests. Below the drum part, the text "互いのバチを打ち鳴らす" (Utaide ari no bachi o uchi nagasu) is written.

System 2: The flute part continues with a similar melodic line. The drum part has a pattern of hits and rests.

System 3: The flute part continues with a similar melodic line. The drum part has a pattern of hits and rests. The word "rit" (ritardando) is written below the flute part.

System 4: The flute part continues with a similar melodic line. The drum part has a pattern of hits and rests.



The musical score is presented in four systems, each with a Flute (笛) staff in treble clef and a Taiko drum (太鼓) staff in a simplified notation system. Measure numbers 41, 49, and 58 are indicated at the start of their respective systems. The Taiko notation uses vertical strokes for hits, with 'x' marks indicating specific rhythmic patterns or accents. A 'rit' (ritardando) marking is placed above the Taiko staff in measure 52. The score concludes with a double bar line in measure 58.

41  
笛  
太鼓

49  
笛  
太鼓

58  
笛  
太鼓

58  
笛  
太鼓

3

The musical score consists of four systems, each with a flute part (flute icon) and a taiko drum part (太鼓 icon). The flute part is written in treble clef with a key signature of one flat (B-flat). The taiko drum part is written on a five-line staff with a common time signature (C) and uses a simplified notation where vertical strokes represent hits and 'x' marks represent specific drum sounds or rests.

- System 1:** Flute measures 61-64. The melody starts with a quarter rest, followed by eighth and quarter notes. The taiko drum part has a steady eighth-note pattern.
- System 2:** Flute measures 65-68. The melody continues with eighth and quarter notes. The taiko drum part has a pattern of eighth notes and 'x' marks.
- System 3:** Flute measures 71-74. Measure 71 is marked with a 'rit' (ritardando) and a slur. The melody features a half note and quarter notes. The taiko drum part has a pattern of eighth notes and 'x' marks.
- System 4:** Flute measures 77-80. The melody continues with eighth and quarter notes. The taiko drum part has a pattern of eighth notes and 'x' marks.

52

57

molto rit

関手

関手

笛 <sup>107</sup>

太鼓

rit

間手

## 別所三頭獅子 岡崎



1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採譜

## 別所三頭獅子 ほねなし

Largo

1982年3月 岳の嶺の祭礼調査報告書を参考に、2017年別所神社奉納時の音楽を採録

すると、古記録として伝えられている可能性はありそうだが、本調査では発見できず古記録・文献の所在は不明である。

## 6.16 備考

### 「岳の幟の祭礼調査報告書」における動作分析

『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)に獅子の踊り基本動作例として次の写真資料<sup>108)</sup>が掲載されている。

さらに『岳の幟の祭礼調査報告書』(1982)では以下のように説明されている。

「社殿から見て下手前から獅子は踊りの場へ入る。囃子方は下手奥になる。雄獅子、雌獅子、雄獅子の順に両手の撥をあげ、足を斜め前にすりあげ、撥を太鼓にあてる。これを、左右くりかえしながら三頭で輪を作るのが『道行き』である。次の振込みとともに足を斜め前にすりあげるのが運歩の基本形とな



道行き(1)



まい込み(2)



かじり(3)



岡崎



道行き(2)



まい込み(3)



かじり(4)



ほねなし



ふり込み



かじり(1)



かじり(5)



まい込み(1)



かじり(2)



かじり(6)

協力 小福田 正喜氏  
指導・解説 上田市観光課  
益子 輝之氏  
撮影 上田市社会教育課  
倉沢 正幸

獅子のおどり

る。足をあげた時足の裏を見るようにという口伝は足を割ることを意味すると思われ三頭獅子に多い伝えである。(中略)

『振込み』は手を横に開いたまま、片足をあげ、残った足でひとつとぶのが振込みである。獅子は三頭が正三角形の頂点に位置することになる。前山という鍋の足である。

なお進行は常に左まわりである。

『まい込み』に入ると足を折り腰をひくくおとし鯀の形になる。この形から『田植獅子』とよばれるというが、これは農作業の芸能化というより、その肉体的苦痛を田植のそれに結びつけたものといえそうである。むしろ力者の芸能から荒事へ移行する『はこ』との関係が考えられよう。

運歩は足をやや前後にし、後の足を後へけり前の足でひとつはずみ、けた足をその少し前へ出す。この時、手は体の前でふるが、常にナンバになるのである。

以下はこの運歩が基本になり、この振りの間に他の振りが入るのである。

『まい込み』では右足の中へ入れこみ両手を左下へ流して右足を外へもどす振りである(中略)テンポは早い。むしろ農作業的色彩はこの部分に見られる。

『まいの部』は蹲の姿勢で体の前で手を振る振りの後束に立って太鼓に撥をあてる。

『かじり』は前半「まいこみ」と同じで、途中撥を三つ打ちあわせ、まわりながら女獅子は左へぬける。男獅子二頭が向かいあい一方が片足を後にたたみ、片足を前へのぼし腰をおとし撥を前へつき一方が上からにらみおろす形をとる。『かじり』はかじりあう形からの称であろう。同じ形が獅子をかえて三度繰り返される。(中略)より技巧的演劇的であるのは、温泉場という土地柄もあろう。

かじりあった後、立って右足をあげ、左足で左まわりにまわるが、一跳躍がほとんどの中で特殊な振りである。間は笛にあわせるもので、(中略)特殊な間ではない。

撥を三つ打ちあわせ女獅子が加わって撥を打ちあわせながら神前に向かって横一列になり「岡崎」になる。(中略)別所では鯀の姿勢で撥をつき地をふたつ打ち(3回目は三つ)体の前で手をふるという単純なものである。

最後のほねなしは『岡崎』の地を打つ振りに束に

立って頭上で大きく手を横にふる振りを組合せたもので、体中の力をぬいて踊る形が骨がないようだというところからの名称であろう。(中略)最後、神前に横にならんだままで終る。特に引込みの手はない。」<sup>109)</sup>

竹内博敏氏によると「踊りの伝承は、岳の幟の祭礼調査報告書に記載されている写真と獅子おどりの分析を参考にしています。ただし鍋の足、鯀の形、荒事へ移行する『はこ』、蹲の姿勢という表現の内容はわかりません。」という<sup>110)</sup>。そこで以下では、岳の幟の祭礼調査報告書における別所三頭獅子の分析と、竹内博敏氏の証言を参考に発生当初の動作再現を試みる。

## 和の身体技法による別所三頭獅子発生当初の動作再現

動作再現にあたり本論で使用する和の身体技法の定義については、すでに表としてまとめている<sup>111)</sup>。今回はさらに図10としてまとめたものを示し用語説明を行う<sup>112)</sup>。

文中使用用語一覧

- |       |          |            |
|-------|----------|------------|
| ● 軸   | ● 丹田     | ● 肩幅       |
| ● 沈み  | ● ひねり・半身 | ● 撞木・撞木の感覚 |
| ● ねじり | ● ナンバ    | ● 踵を返す     |

## 1. 和の身体技法の定義

(次ページ 図10)

## 2. 動作再現対象

別所三頭獅子(雄獅子2・雌獅子1)

- ・⑤かじりで、雌獅子は左へ抜け待機し、雄獅子が向かい合う隊形へ移動するが、それ以外、全獅子全演目で同じ動きをする<sup>113)</sup>。
- ・撮影モデル<sup>114)</sup>は雄獅子の動きを行う。

## 3. 身体感覚的動作再現方法

1. 別所神社において奉納された別所三頭獅子をビデオ撮影したものをモニターにてスロー再生し分析を行った<sup>115)</sup>。
2. 別所三頭獅子の動作模倣を、「長野大学和太鼓サークル『和(NAGI)』」2019年度卒業生5名で行った。<sup>116)</sup>
3. 和の身体技法に立脚し別所三頭獅子の動作を再現しながら、1台の携帯でビデオ録画し映像



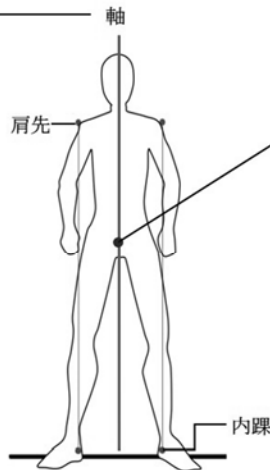
## 和の身体技法の定義

### 軸

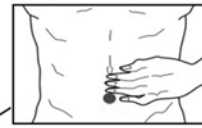
中心線感覚のことであり、立位時において、頭頂から背骨・骨盤の背中側中央にある仙骨を結び、地面と垂直に交わる線のことである。動作を伴う場合は軸が背骨から外れ体の外になることもあるが、立位時に立てた軸を感覚的に抽象化させたもので、常に体の左右のバランスを取りながら地面と垂直に交わる。美しい歩行とはこの軸に振れがないことである。一般的に、武道では正中線・体軸といい、ダンスではセンターとよばれ重要とされる。

### 肩幅

肩先と内踝を結ぶ直線が地面と垂直に交わる足幅を指す。



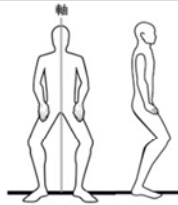
### 丹田



中心点感覚のことであり、ヘソ下三寸、下腹部の上方に位置する。左右の手どちらかの人差し指・中指・薬指をそろえ、ヘソに人差し指先を当てた時の薬指先場所である。呼吸音がしないように、静かにフーッと息を吐きながら丹田に指を当てると膨らむ感覚が出る。芸道、禅や武道などではもっとも重要視される場所であり、肚を握える、決める等の肚は丹田を意味する。

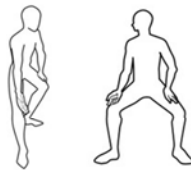
### 沈み

垂直感覚のことであり、膝を抜き、腰を地面に対して垂直に落とした姿勢である。その方法は、まず立位時足裏の体重を足指先と足親指の付け根の第一跗骨に乗せ、足裏を地面から離さないように体軸を前傾させる。次に膝裏から膝頭へ向け意識の線を通すことを行う。動作そのものは一見屈伸のようだが、膝を曲げるのではなく抜くのである。曲げるは一本の鉄の棒を筋肉の方で湾曲するような膝使いであり、抜くは鎌番が閉じるように膝を使うことで、筋肉ではなく骨に意識がいくことである。



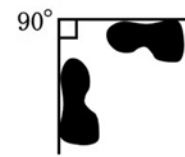
### ひねり・半身

斜め感覚を指す。ひねりとは、半身をつくり出すための動きのことを指し、体を左右に分け、左右どちらかを前方に出す動作のことである。これに対して、半身とは、ひねりで作られた体の姿のことを指す。つまり、対象に対して斜めに構える姿勢の事である。このひねり・半身は、両足でソの字をつくり、前方に出した足先方向に膝と同側の肩を向ける事でつくり出すことができる。代表的な姿勢はいわゆる「お控えなすって」であり、昔の渡世人が仁義をきる時の姿で、相手に対して礼を尽くす意味がある。



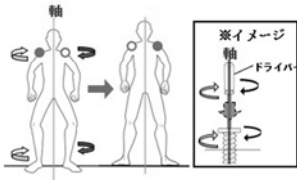
### 撞木・撞木の感覚

どちらも前後感覚のことであり、撞木は具体的に体を左右に分け足を前後させ、前方に出した足の踵と、後方の足の踵で直角の関係をつくることであり、撞木の感覚とは具体的な踵と踵の直角関係は取らないが身体感覚としては撞木と同様に前後感覚のことであり、撞木は仏具として半鐘などを鳴らす道具であり、多くは丁字形に作られている。お寺の釣鐘を叩く丸太は丁字形ではないが、鐘の打面に対し丁字に当たるように設置されていることから撞木といい、対象に対して追ったり押し込んでいける姿勢のことである。



### ねじり

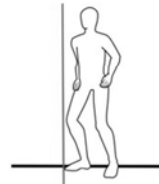
回転感覚のことであり、一つの軸を中心に、右と左、上と下を逆転させる事で起こる動きのことである。基本的にはネジを締めるイメージで、回転軸を動かすが、実際には外側を回すことであり、肩を回すとは、右と左の肩先を同時に回転移動させることである。日本の踊りでは、前向きから後ろ向きに方向を変えるときや、左右に体を回すように振るときなどに使い、左回転では右肩を前に、左肩を後ろに移動させ、右回転では左肩を前に、右肩を後ろに移動させることで回転をつくりだすことである。



### ナンバ

右前左後ろに集中する斜めの感覚であり、ナンバ歩きに代表されるように同側の手足を同時に動かす日本人古来の動きかたの基本である。また農作業における草刈り鎌や鋸などを使うときもナンバの体使いが基本であり、無理無駄がなく合理的な作業ができる。伝統的な郷土芸能の身のこなしはナンバで構成されている。近年ではスポーツにおいてもナンバの効用の研究が進んでいる。

動きを伴う身体技法の③沈み、④ひねり・半身、⑤撞木・撞木の感覚、⑥ねじり、⑦踵を返すは、ナンバの動きに含まれる。



### 踵を内側に押し出す



### 踵を外側に押し出す



### 踵を返す

向き合おうとしていた対象に対して方向転換をする動きである。方向を変化させるときは意識的に踵を内側または外側に押し出し、上体を平面に保ったまま踏み出した足に乗ることが重要である。踵の動きで方向を移行させることでメリハリと重厚感のある動きができ、身のこなしに品を出すことができる。

図10 和の身体技法の定義

をスクリーンショットにて写真化<sup>117)</sup>を行なった。「5. 各演目の身体感覚的動作再現結果」に示す動作再現写真はこの時のものである。

#### 4. 身体感覚的動作再現対象演目一覧

- 1) 道行き ・ 2) ふり込み ・ 3) まい込み  
 ・ 4) まいの部 ・ 5) かじり ・ 6) 岡崎  
 ・ 7) ほねなし

#### 5. 各演目の身体感覚的動作再現(動画あり)<sup>118)</sup>

以下の説明は別所神社(境内)図11<sup>119)</sup>で踊られる時のものである。したがって、図11で示すように、別所神社側を「正面」、別所神社の反対側を「後ろ」。お囃子側を「右側」、お囃子と反対側を「左側」、円の中心側を「内」、円の中心の反対側を「外」、進行方向は基本的に左回りであり、左回りに進むときは「進行方向」、右回りに進むときは「反対方向」と表記する。

##### 備考1 (動作の共通点)

- ・ 上体は脇張りを保つ。

- ・ 足幅とは肩幅のことである。
- ・ 撥…撥には握り側に房が付いており、房が垂れるように握る。握り方は人差し指に親指を添え、小指で締めるように握る。
- ・ 撥を打ち鳴らす際は、右足を上げたときには右撥で左撥の上から左撥を打ち、左足を上げたときには左撥で右撥の上から右撥を打つ。
- ・ 撥先で地面を叩く際は、笛に合わせる。
- ・ 腰を引き立てるとは、膝を伸ばすことではない。
- ・ 各振りの終わりで吹かれる笛「ピッ」は、振りの終わりであると同時に次の振りの始まりでもある。
- ・ 間とは連続している事と事との間の時間である。

##### 備考2 (表記上の注意点)

- ・ 和の身体技法においては「ねじり」、上体のみの場合は「捻り」と表記する。
- ・ 演技は左回りに進行するため、写真は右から左に並べる。

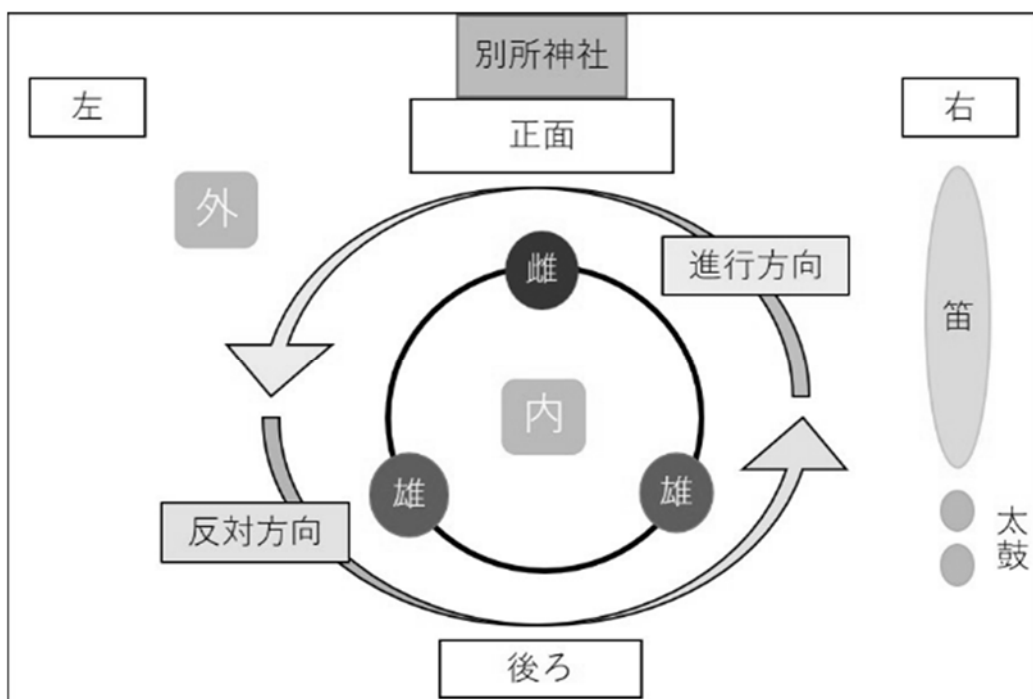


図 11 : 別所神社 (境内)

## ●道行き（入場）



写真22

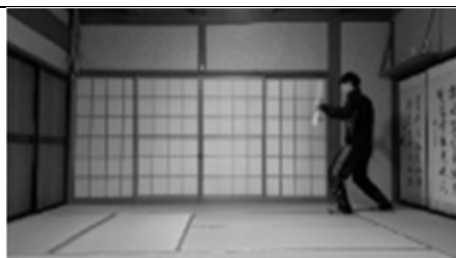


写真23



写真24

①：左足から歩き始める。左足の踵を内側に押し出すように歩行に入り、着地と同時につま先を前方に向け、体重を左足に乗せながら、撞木で右足を引き寄せ、同時に太鼓を打つ仕草(手首を返す)で腰を引き立てる。(写真22～24)



写真25



写真26



写真27

②：右足の踵を内側に押し出すように歩行に入り、着地と同時につま先を前方に向け、体重を右足に乗せながら、撞木で左足を引き寄せ、同時に太鼓を打つ仕草(手首を返す)で腰を引き立てる。(写真25～27)

・笛の合図があるまで①、②を繰り返す。

## ●つなぎ



写真28



写真29



写真30

・笛の「ピッ」で右足の踵を外側へ押し出し、身体を円の内に向ける。(写真28～30)

●ふり込み



写真31



写真32



写真33

①：つなぎから、沈みながら左足に重さを移動させると共に、右足を引き寄せ、左足で踏み浮き、右足の踵を左膝裏に沿わせる。この時、捻じることなく踏みに合わせて、太鼓を打つ仕草を行う。(写真31～33)



写真34



写真35



写真36

②：沈みながら右足に重さを移動させると共に、左足を引き寄せ、右足で踏み浮き、左足の踵を右膝裏に沿わせる。この時、捻じることなく踏みに合わせて、太鼓を打つ仕草を行う。(写真34～36)

③：①を行う。

④：②を行う。



写真37



写真38



写真39



写真40

⑤ : ④で沿わせた左足の踵を内側に押し出しながら大きく踏み込み、ねじりの動きで右回りに踏み浮き、左足で着地。浮いた勢いを抑えるために、2回左足を踏み、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行う。その後、右足を肩幅に置き、円の外向きになる。(写真37～40)



写真41



写真42



写真43

⑥ : 沈みながら右足に重さを移動させると共に、左足を引き寄せ、右足で踏み浮き、左足の踵を右膝裏に沿わせる。この時の上体は、体を捻じることなく踏みに合わせ、太鼓を打つ仕草を行う。(写真41～43)



写真44



写真45



写真46

⑦：沈みながら左足に重さを移動させると共に、右足を引き寄せ、左足で踏み浮き、右足の踵を左膝裏に沿わせるこの時の上体は、体を捻じることなく踏みに合わせ、太鼓を打つ仕草を行う。(写真44～46)

⑧：⑥を行う。

⑨：⑦を行う。



写真50

⑩：⑨で沿わせた右足の踵を内側に押し出ししながら大きく踏み込み、ねじりの動きで左回りに踏み浮き、右足で着地。浮いた勢いを抑えるために、2回右足を踏み、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行う。その後、左足を肩幅に置き、円の内向きになる。(写真47～50)

・①から⑩をもう1セット行う。

・①、②を行い、笛の「ピッ」が鳴る。



写真47



写真48



写真49

### ●つなぎ



写真51



写真52



写真53

- ・笛の「ピッ」で、左足が進行方向を向くように左足の踵を外側に押し出すと共に、右足を左足後方に引き、左足前の撞木の形を取る。(写真51～53)

●まい込み



写真57

- ①：つなぎからねじりの動きで進行方向に左足で踏み浮き、踏みに合わせ太鼓を打つ仕草を行い、右足前の撞木の形を取る。さらにねじりの動きで進行方向に右足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足前の撞木の形を取り、円の外向きになる。(写真54～57)



写真54



写真58



写真55



写真59



写真56



写真60

- ②：右足が進行方向を向くように踵を外側に押し出し左足を大きく引き、右足前の撞木の形を

取り、円の内向きになる。(写真 58～60)。



写真61



写真62



写真63



写真64



写真65



写真66

③：ねじりの動きで進行方向に右足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足前の撞木の形を取る。さらにねじりの動きで進行方向に左足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、右足前の撞木の形を取り、円の内向きになる。(写真61～66)



写真67



写真68



写真69

④：左足が進行方向を向くように踵を外側に押し出し右足を大きく引き、左足前の撞木の形を取



り、円の外向きになる。(写真67～69)



写真70



写真71



写真72



写真73



写真74



写真75



写真76



写真77



写真78



写真79

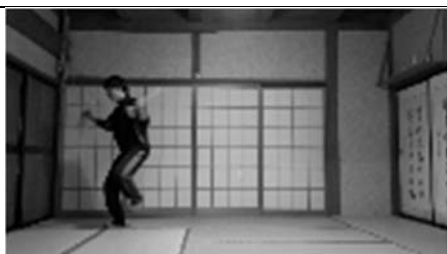


写真80



写真81

- ⑤：右足前の撞木の形、左足前の撞木の形と足を入れ替えながら4回踏み浮き、5回目はねじりの動きで進行方向に左足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、右足前の撞木の形を取り、進行方向に合わせて左足を右足に沿わせ、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真70～81)

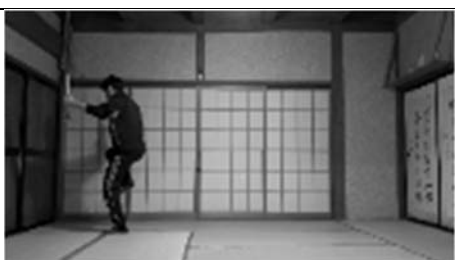


写真82

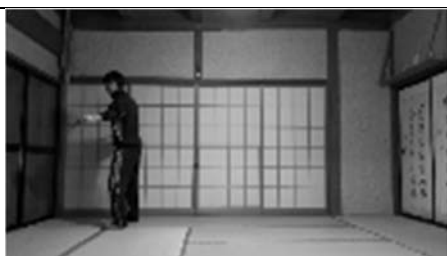


写真83

- ⑥：a.右足を肩幅よりやや狭めに開き、太鼓を打

つ仕草で腰を引き立てる。(写真82・83)

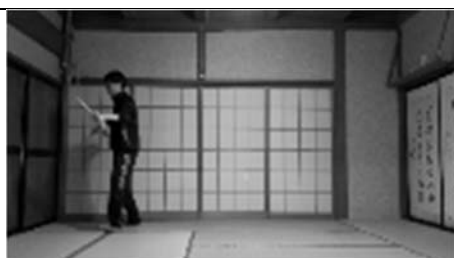


写真84

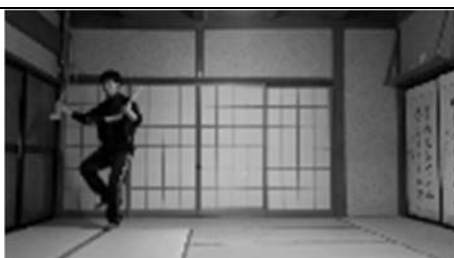


写真85



写真86

- b.左足の踵を内側に押し出し、円の内を向きながら右足を置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真84～86)



写真87



写真88



写真89

c. 右足の踵を外側に押し出し、左足を外側に置き、反対方向を向き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真87～89)



写真90



写真91



写真92

d. 右足の踵を内側に押し出し、円の内を向きながら左足を置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真90～92)



写真93

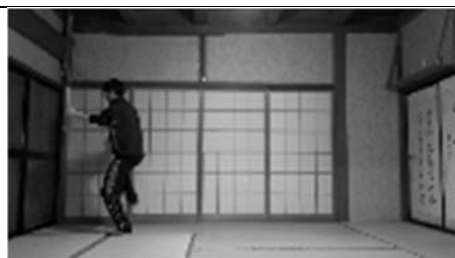


写真94

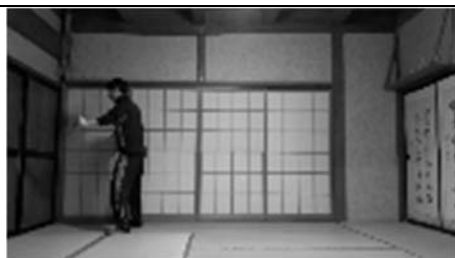


写真95

e. 左足の踵を外側に押し出し、進行方向を向きながら右足を外側に置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真93～95)

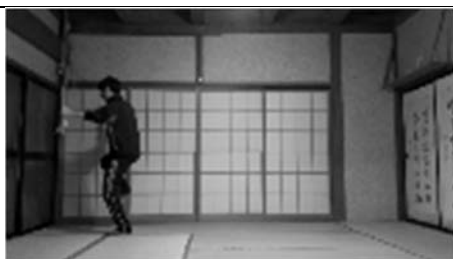


写真96



写真97



写真98

aからeを1セットとして、さらにもう1セット  
行い、最後は両足で踏み沈む。(写真96～98)

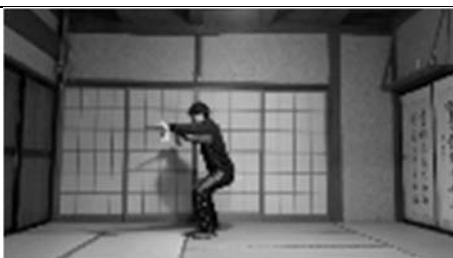


写真99



写真100



写真101



写真102



写真103



写真104

⑦: この後、踊り手3人が右足前の撞木の形で円の内を向き、三角形を作った状態から右手で地面をならす動作を行う。

そのために、左足の踵を内側に押し出しながら右足に沿え、左手は胸前で体の軸に沿える。さらに右足は右足前の撞木の形になるように円の内に入り踏み出す。右手は右足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せる。右足を踏むと共に左足に沿わせたのち、左足を外に開き、反対方向を向く。(写真99～104)



写真105



写真106



写真107

⑧: a. 右足の踵を内側に押し出し、円の内を向きながら左足を置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真105～107)



写真108



写真109



写真110

b. 左足の踵を外側に押し出し、右足を外側に置き、進行方向を向き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真108～110)



写真111



写真112



写真113

c.左足の踵を内側に押し出し、円の内を向きながら右足を置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真111～113)

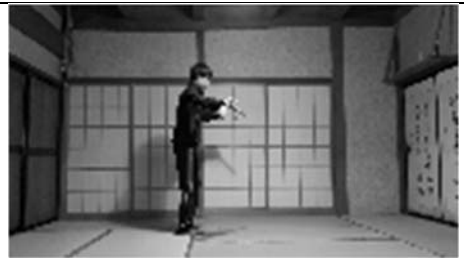


写真116



写真117

d.右足の踵を外側に押し出し、反対方向を向きながら左足を外側に置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立て、最後は両足で踏み沈む。(写真114～117)



写真114



写真115



写真118



写真119



写真120



写真121



写真122



写真123

- ⑨: この後、踊り手3人が左足前の撞木の形で円の内を向き、三角形を作った状態から左手で地面をならす動作を行う。  
 そのため、右足の踵を内側に押し出しながら左足に沿え、右手を胸の前で体の軸に沿える。さらに左足は左足前の撞木の形になるように円の内へ踏み出す。左手は左足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せる。左足を踏むと共に右足に沿わせたのち、

右足を外に開き、進行方向を向く。(写真118～123)



写真124



写真125



写真126

- ⑩: a. 左足の踵を内側に押し出し、円の内を向きながら右足を置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真124～126)



写真127



写真128



写真129

b.右足の踵を外側に押し出し、左足を外側に置き、反対方向を向き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真127～129)



写真130



写真131



写真132

c.右足の踵を内側に押し出し、円の内を向きながら左足を置き、太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真130～132)



写真133



写真134



写真135





写真136

d.左足の踵を外側に押し出し、進行方向を向  
きながら右足を外側に置き、太鼓を打つ仕  
草で腰を引き立て、最後は両足で踏み沈む。  
(写真133～136)

⑪：①から⑩を1セットとし、さらにもう2セット繰  
り返す。

●つなぎ



写真137



写真138



写真139

・笛の「ピッ」で、右足を左足後方に引き、左足前  
の撞木の形を取る。  
(写真137～139)

●まいの部



写真140



写真141



写真142



写真143



写真144



写真145

①：つなぎからねじりの動きで進行方向に左足で踏み浮くと共に、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、右足前の撞木の形を取る。さらにねじりの動きで進行方向に右足で踏み浮くと共に、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足前の撞木の形を取り、円の外向きになる。(写真140～145)



写真146



写真147



写真148

②：右足が進行方向を向くように踵を外側に押し出し、左足を右足後方に引き、右足前の撞木の形を取り円の内向きになる。(写真146～148)



写真149



写真150



写真151



写真152



写真153



写真154

③：ねじりの動きで進行方向に右足で踏み浮くと共に、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足前の撞木の形を取る。さらにねじりの動きで進行方向に左足で踏み浮くと共に、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、右足前の撞木の形を取り、円の内向きになる。(写真149～154)



写真155



写真156



写真157

④：左足が進行方向を向くように踵を外側に押し出し、右足を左足後方に引き左足前の撞木の形を取り、円の外向きになる。(写真155～157)



写真158



写真159



写真160

⑤ : 円の外向きのまま、左足前半身から右足前半身に移動する。この時舞込みよりも時間をかけて行う。(写真158～160)



写真161



写真162



写真163



写真164



写真165



写真166

⑥ : 左足が進行方向を向くように踵を内側に押し出し、ねじりの動きで右足を一步進行方向に進め、円の内を向く。この時舞込みよりも時間をかけて行う。(写真161～166)



写真167



写真168



写真169



写真170



写真171



写真172

入れ替えながら2回踏む。(写真167～172)



写真173



写真174



写真175

さらに左足の踵を内側に押し出ししながら円の内を向き、右足を揃える。(写真173～175)



写真176

⑦：左足前の撞木の形、右足前の撞木の形と足を



写真177



写真178



写真179



写真180



写真181



写真182



写真183



写真184

間を入れ、3回沈み浮きを繰り返し、沈みに合わせて太鼓を打つ仕草を行う。3回目の浮きを利用して、左足の踵を外側に押し出し、肩幅で右足、左足と踏み、進行方向を向く。(写真176～184)



写真185



写真186



写真187



写真188



写真189



写真190



写真191



写真192

⑧：間を入れ、3回沈み浮きを繰り返し、沈みに合わせて太鼓を打つ仕草を行う。3回目の浮きを利用して、左足の踵を内側に押し出し、右足、左足と踏み、肩幅で反対方向を向く。(写真185～192)



写真193



写真194

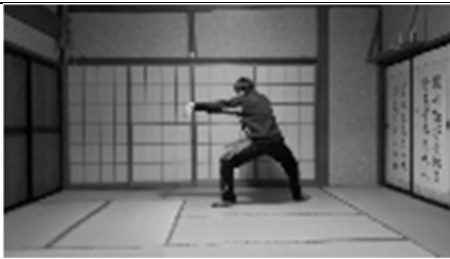


写真195

⑨：左足が反対方向を向くように踵を内側に押し出し、右足を左足後方に引き、左足前の撞木の形を取り、円の外向きになる。(写真193～195)

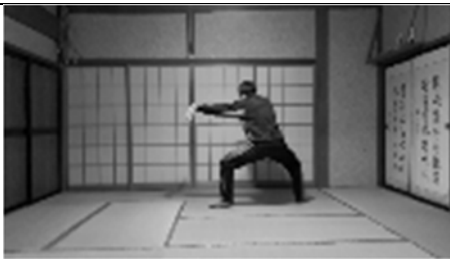


写真196



写真197

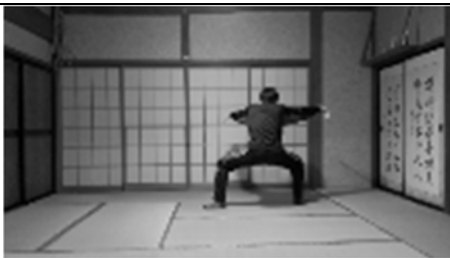


写真198

⑩：⑤と同じく、円の外向きのまま、左足前半身から右足前半身に移動する。この時舞込みよりも時間をかけて行う。(写真196～198)

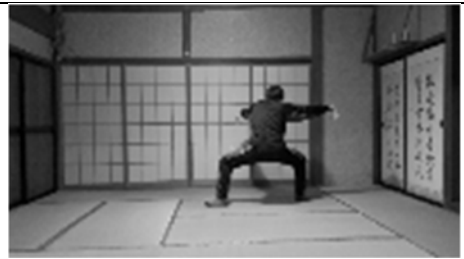


写真199



写真200



写真201

⑪：左足の踵を進行方向に押し出し、ねじりの動きで右足を一步進行方向に進め、の内を向く。この時舞込みよりも時間をかけて行う。(写真199～201)



写真202





写真203



写真204

⑫：円の外向きのまま、右足前半身から左足前半身に移動する。この時舞込みよりも時間をかけて行う。(写真202～204)



写真205



写真206



写真207



写真208



写真209



写真210



写真211



写真212



写真213

⑬：左足前の撞木の形、右足前の撞木の形と足を入れ替えながら2回踏む。太鼓を打つ仕草と共に右足を肩幅に置き、進行方向を向く。(写真205～213)



写真214



写真215



写真216



写真217



写真218

次いで円の内を向くために、左足を上げながら左足の踵を内側に押し出し、左足、右足と太鼓を打つ仕草と共に踏む。(写真214～218)



写真219



写真220



写真221



写真222



写真223



写真224

ながら左足の踵を外側に押し出し、左足、右足と太鼓を打つ仕草と共に踏み、沈む。(写真219～224)

# ●つなぎ



写真225



写真226

・笛「ピッ」で進行方向を向いたまま、右足に重さを移動させる。(写真225・226)<sup>120)</sup> かじり

# ・かじり I



写真227

さらに、進行方向を向くために、左足を上げ



写真228



写真229



写真230



写真231



写真232



写真233



写真234

①：つなぎから左足を引き寄せ、左手は胸の前で体の軸に沿える。引き寄せた左足の踵を内側に押し出しながら、円の内に向かって右足前の撞木の形を取り、右足に重さを移動する。次いで、右手は右足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せ、太鼓を1回打つ仕草と共に右足を踏む。さらに左足を円の外側に踏み出し、太鼓を1回打つ仕草と共に左足を踏む。このとき、反対方向を向いている。(写真227～234)



写真235



写真236



写真237



写真238



写真239



写真240



写真241



写真242

②：沈みながら左足に重さを移動させると共に、右足を引き寄せ、右手は胸の前で体の軸に沿える。引き寄せた右足の踵を内側に押し出しながら、円の内に向かって左足前の撞木の形を取り、左足に重さを移動する。次いで、左手は左足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せ、太鼓を1回打つ仕草と共に左足を踏む。さらに右足を円の外側に踏み出し、太鼓を1回打つ仕草と共に右足を踏む。このとき、進行方向を向いている。(写真235～242)

③：①を行う。

④：②を行う。



写真243



写真244



写真245



写真246



写真247



写真248

⑤: 4回沈み浮きを行う。沈みに合わせて太鼓を打つ仕草を行う。(写真243～248)



写真249



写真250



写真251



写真252



写真253



写真254

⑥: 4回目の沈み後の間で、左足の踵を内側に押し出し、左足に乗ることで方向転換を行い、肩幅よりやや狭めにした足幅で太鼓を打つ仕草と共に右足、左足と踏み、反対方向を向く。(写真249～254)

⑦: ⑤を行う。



写真255



写真256



写真257



写真258



写真259



写真260

⑧: 4回目の沈み後の間で、右足の踵を内側に押し出し、右足に乗ることで方向転換を行い、肩幅よりやや狭めにした足幅で太鼓を打つ仕草と共に左足、右足と踏み、進行方向を向く。(写真255～260)



写真261



写真262



写真263



写真264



写真265



写真266

⑨：左足の踵を内側に押し出し、左足に乗ること  
で方向転換を行い、肩幅よりやや狭めにした足  
幅で右足、左足と踏み動作に合わせ、太鼓を打  
つ仕草を行い、反対方向を向く。(写真261～266)



写真267



写真268



写真269



写真270





写真271



写真272

⑩：右足の踵を内側に押し出し、右足に乗ることで方向転換を行い、肩幅よりやや狭めにした足幅で左足、右足と踏み動作に合わせ、太鼓を打つ仕草を行い、進行方向を向く。(写真267～272)



写真273



写真274



写真275



写真276



写真277



写真278

⑪：左足の踵を外側に押し出し、右足を引くことで左足前半身に移動する。円の外向きのまま右足前の半身に移動。このとき、半身から半身への移動は舞込みよりも時間をかけて行う。次に左足の踵を内側に押し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで右足を一步進行方向に進め、右足前半身に移動し、円の内を向く。(写真273～278)



写真279



写真280



写真281



写真282



写真283



写真284

⑫：円の内向きのまま、右足前半身から左足前半身に移動する。このとき、半身から半身への移動は舞込みよりも時間をかけて行う。右足の踵を内側に押し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで左足を一步進行方向に進め、円の外を向く。(写真279～284)

⑬：⑪⑫をあと3セット繰り返す。



写真285



写真286

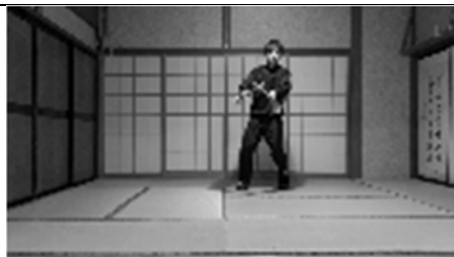


写真287



写真288

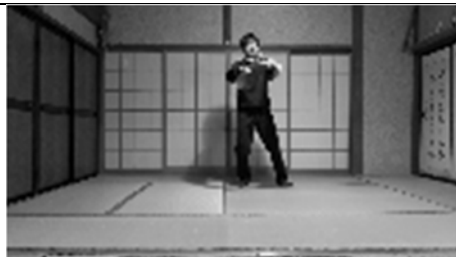


写真289



写真290

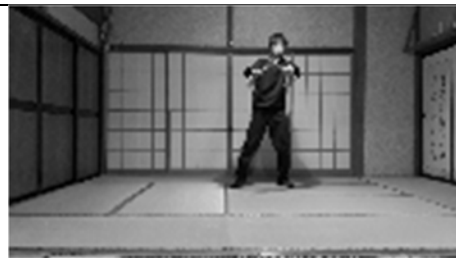


写真291



写真292



写真293

⑭:3セット目最後の左足の踵を内側に押し出ししながら円の内を向き、右足、左足、右足の踏みの動作に合わせ撥を打ち鳴らしたのち、脇張りの姿勢を保ち、両足で踏み沈む。(写真285～293)

⑮:⑪⑫を5セット繰り返す。5セット目は躰子に合わせ、やや早めに移動する。このとき円の外側を向く。



写真294



写真295



写真296



写真297



写真298



写真299

⑩：5セット目最後の左足の踵を内側に押し出し、踏み浮くと共に右足を上げながら撥先を見つつ上体を起こし、緩ませながら右足前の撞木の形を取り、右足つま先方向に枝垂れ、揺れに身を任せる。(写真294～299) <sup>121)</sup>



写真300



写真301



写真302



写真303



写真304



写真305



写真306



写真307



写真308

⑰：左足の踵を内側に押し出し、右足に重さを移動させると共に、左足を引き寄せ、左手は胸の前で体の軸に沿える。引き寄せた左足の踵を内側に押し出しながら円の内に向かって右足前の撞木の形を取り、右足に重さを移動する。次いで、右手は右足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せる。右足を引き寄せ、右手は胸の前で体の軸に沿える。引き寄せた右足の踵を内側に押し出しながら円の内に向かって左足前の撞木の形を取り、左足に重さを移動する。次いで、左手は左足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せ、太鼓を打つ仕草と共に腰を立てる。(写真300～308)

## ・かじりⅡ



写真309



写真310

①：右足を肩幅に開くと共に太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真309・310)



写真311



写真312

②：舞込み①②①の動作で、正面を底辺とし、雌獅子を頂点とした逆三角形の隊形に移動。雄獅子同士は向き合い、雌獅子は後方へ抜け、正面を向いて雄獅子の演技が終わるまで<sup>まき</sup>跪坐で待機。(写真311・312)



写真313



写真314



写真315



写真316



写真317



写真318



写真319



写真320



写真321

③：右足、左足、右足の踏みの動作に合わせて撥を打ち鳴らしたのち、脇張りの姿勢を保ち、両足で踏み沈む。(写真313～321)



写真322



写真323



写真324

④：右足を1歩引き、左足前半身になる。(写真322～324)



写真325



写真326



写真327



写真328



写真329



写真330

⑤：左足で踏み浮き、右足を一步前に出し、右足

前半身になる。右足で踏み浮き、左足を一步前に出し、左足前半身になる。この動きを3セット行う。このとき、雄獅子2頭が互いに距離を縮める。(写真325～330)



写真331



写真332



写真333

⑥：さらに左足で踏み浮き、右足を一步前に出し、右足前半身になる。(写真331～333)



写真334



写真335



写真336



写真337



写真338

⑦：右足前半身から右足で踏み浮き、ねじりの動きで、左足前半身の形を取る。(写真334～338)





写真339



写真340



写真341



写真342



写真343



写真344



写真345



写真346



写真347



写真348

⑧：左足前半身から左足で踏み浮き、ねじりの動きで、右足前半身の形を取る。(写真339～343)



写真349



写真350



写真351



写真352

⑨：右足前半身から右足で踏み浮き、ねじりの動きで、左足前半身の形を取る。左足に重さ移動させ、太鼓を打つ仕草で右足を上げ、左足で8回踏み浮きながら、2頭が正面を背に横並びになる。上体は、右手は肩の高さで保持し、右脇腹を伸ばし、同時に左わき腹を縮めることで、上方を見る。(写真344～352)



写真353



写真354



写真355



写真356



写真357



写真358



写真359



写真360



写真361

⑩: ⑨の踏み浮き後、右側の雄獅子は右足を1歩出し、右足前の撞木の形を取る。左手は手の甲を外にして腰に当て、右手は肩の高さで保持し、上体を波打たせるような仕草で左側の雄獅子を威嚇する。さらに、右脇腹を伸ばし、撥先を見ながら上体を起こし、波打たせるような仕草で2回目の威嚇を行う。(写真353～361)



写真362



写真363



写真364



写真365



写真366



写真367



写真368



写真369



写真370

⑪：⑨の踏み浮き後、左側の雄獅子は右足を1歩引き、左足を軽く伸ばし、左足前の跪坐になる。両手は撥先を地面に下ろし、上体を波打たせるような仕草で右側の雄獅子の威嚇を受ける。さらに、左脇腹を伸ばし、上体を起こし、波打たせるような仕草で2回目の威嚇を受ける。(写真362～370)

⑫：⑦⑧を行う。



写真371



写真372



写真373



写真374



写真375



写真376

- ⑬：右足に重さを移動させ、太鼓を打つ仕草で左足を上げ、右足で8回踏み浮く。  
上体は、左手は肩の高さで保持し、左脇腹を伸ばし、同時に右脇腹を縮めることで、上方を見る。(写真371～376)



写真377



写真378



写真379



写真380



写真381



写真382



写真383



写真384



写真385

左足を1歩出し、左足前の撞木の形を取る。右手は手の甲を外にして腰に当て、左手は肩の高さで保持し、上体を波打たせるような仕草で左側の雄獅子を威嚇する。さらに、左脇腹を伸ばし、撥先を見ながら上体を起こし、波打たせるような仕草で2回目の威嚇を行う。(写真377～385)

\*左側の雄獅子は、⑩の姿勢のまま、上体を波打たせるような仕草で右側の雄獅子の威嚇を受ける。さらに、左脇腹を伸ばし、上体を起こし、波打たせるような仕草で2回目の威嚇を受ける。

- ・ かじりⅡからかじりⅢのつなぎ
- ・ 右側の獅子の動き



写真386



写真387



写真388

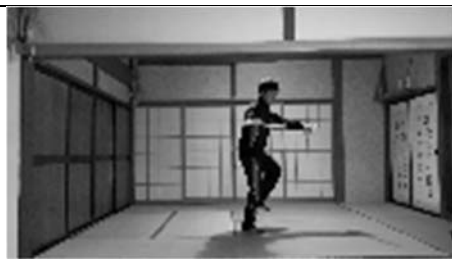


写真389



写真390

- ①：威嚇終了後、右足の踵を外側に押し出し、右足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足を右足後方に引き、右足前の撞木の形を取る。(写真386～390)

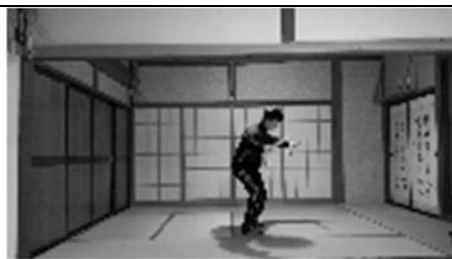


写真391



写真392



写真393



写真394



写真395

②:左足の踵を外側に押し出し、左足で踏み浮き、  
踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、右足を  
左足後方に引き、左足前の撞木の形を取る。  
(写真391～395)

③: ①②をさらに2セット行う。



写真396



写真397



写真398



写真399



写真400



写真401



写真402

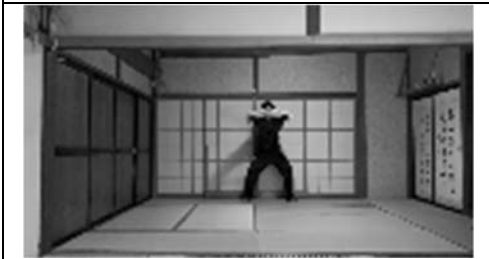


写真403

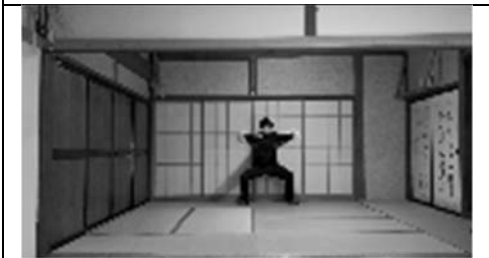


写真404

④：①を行い、右足、左足、右足の踏みの動作に合わせ撥を打ち鳴らしたのち、脇張りの姿勢を保ち、両足で踏み沈む。(写真396～404)

・左側の獅子の動き



写真405



写真406



写真407

威嚇終了後、右側の獅子の動きの①、②中はその場に留まる。③から⑥までは右側の獅子と同じ動きを行う。(写真405～407)

・かじりⅢ

かじりⅡの④から始まる。④から⑫まで動作は同じであるが、左側の獅子が威嚇を行い、右側の獅子が威嚇を受ける体制に交代する。

・かじりⅢからかじりⅣのつなぎ

- ・左側の獅子の動き（かじりⅡ・右側の獅子と同じ動き）

①：威嚇終了後、右足の踵を外側に押し出し、右足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足を右足後方に引き、右足前の撞木の形を取る。

②：左足の踵を外側に押し出し、左足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、右足を左足後方に引き、左足前の撞木の形を取る。



③：①②をさらに2セット行う。

④：①を行い、右足、左足、右足の踏みの動作に  
合わせ撥を打ち鳴らしたのち、脇張りの姿勢を  
保ち、両足で踏み沈む。

・右側の獅子

威嚇終了後、右側の獅子の動きの①、②中はその  
場に留まる。③から⑥までは右側の獅子と同じ動  
きを行う。



写真408



写真409



写真410



写真411



写真412



写真413



写真414



写真415



写真416

・④の際、雄獅子が①を行った後、雌獅子は右足、

左足、右足と立ち上がりながら、踏みの動作に合わせ撥を打ち鳴らしたのち、脇張りの姿勢を保ち、両足で踏み沈む。(写真408～416)

・かじりIV



写真417



写真418



写真419

①：左足が進行方向を向くように左足の踵を内側に押し出すと共に、右足を左足後方に引き、左足前の撞木の形を取る。(写真417～419)



写真420



写真421



写真422

②：進行方向に左足で踏み浮き、踏みに合わせ太鼓を打つ仕草を行い、右足前の撞木の形を取る。(写真420～422)



写真423



写真424



写真425

③：「」さらに進行方向に右足で踏み浮き、踏みに合わせて太鼓を打つ仕草を行い、左足前の撞木の形を取る。(写真423～425)

④：②③をさらに4セット繰り返し、5セット目は囃子に合わせ、やや早めに移動する。



写真426



写真427



写真428



写真429



写真430



写真431

⑤：5セット目終了後、左足で踏み浮きながら、左足の踵を内側に押し出し、重さを移動させ、右足を上げながら撥先を見つつ上体を起こし、緩ませながら右足前の撞木の形を取り、右足つま先方向に枝垂れ、揺れに身を任せる。(写真426～431)



写真432



写真433



写真434



写真435



写真436



写真437

内側に1歩踏み出し、右足前の撞木の形を取る。左手は胸の前で体の軸に沿える。右手は右足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せる。(写真432～437)



写真438



写真439



写真440



写真441

⑥：左足の踵を内側に押し出ししながら右足を円の



写真442



写真443

⑦：引き寄せた右足の踵を内側に押し出しながら左足を円の内側に1歩踏み出し、右手は胸の前で体の軸に沿える。左手は左足と共に地面をならすように円の内から体の軸に向かって引き寄せ、太鼓を打つ仕草と共に腰を立てる。(写真438～443)



写真444



写真445



写真446

⑧：右足を肩幅に開くと共に太鼓を打つ仕草で腰を引き立てる。(写真444～446)



写真447



写真448



写真449



写真450



写真451



写真452



写真453



写真454



写真455

⑨：正面に向かって雌獅子を頂点とした三角形の隊形に移動するために、舞込み①②①の動作を行う。最後の①で上げた右足から、右足、左足、右足の踏み動作に合わせて撥を打ち鳴らしたのち、脇張りの姿勢を保ち、両足で踏み沈む。(写真447～455)



写真456

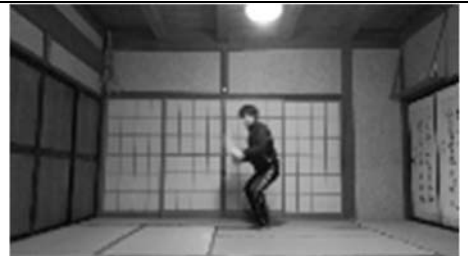


写真457



写真458

⑩：左足の踵を外側に押し出ししながら右足を左足後方に引き、右側を向く。左足の踵を内側に押

し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで左側を向き、沈む。(写真456～458)



写真459



写真460



写真461



写真462

⑪：太鼓を打つ仕草と共に右足で1回踏み浮き、さらに2回踏み浮きながら正面を向く。この際、目線および両撥は天を指す。その後、四股立ちの姿勢で、撥先を地に下す。(写真459～462)

⑫：⑩⑪を行う。



写真463



写真464

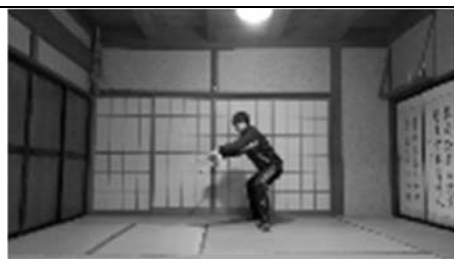


写真465

⑬：左足の踵を外側に押し出し、右足を右後方に引きながら右足前半身に移行し、右側を向く。上体は脇張りの姿勢を保つ。(写真463～465)



写真466



写真467



写真468

⑭：左足の踵を内側に押し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで左側を向く。(写真466～468)



写真469



写真470



写真471

⑮：右足の踵を内側に押し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで右側を向く。(写真469～471)



写真472



写真473



写真474





写真475

⑩：左足の踵を内側に押し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで左側を向き、左足前半身に移行。(写真472～475)



写真479

⑪：右足の踵を内側に押し出し、太鼓を打つ仕草と共にねじりの動きで右側を向き、沈む。(写真476～479)



写真476



写真480



写真477



写真481



写真478



写真482



写真483



写真484



写真485

⑬: 太鼓を打つ仕草と共に左足で1回踏み浮き、さらに2回踏み浮きながら正面を向く。この際、目線および両撥は天を指す。その後、四股立ちの姿勢で、撥先を地に下す。(写真480～485)

●岡崎



写真486



写真487



写真488



写真489



写真490



写真491



写真492



写真493



写真494

①：笛の「ピツ」で四股立ちの姿勢からさらに沈み、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。次いで太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、四股立ちの姿勢で、撥先を地に下す。四股立ちの姿勢から、浮き、沈みを1回ずつ行う。このとき、浮きに合わせて両撥は天を指し、沈みに合わせて撥先を地に下す。(写真486～494)



写真495



写真496



写真497



写真498



写真499



写真500



写真501



写真502



写真503



写真504

②：四股立ちの姿勢からさらに沈み、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。次いで太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、四股立ちの姿勢で、撥先で地を2回叩き、上体を引き立てる。(写真495～504)



写真505



写真506



写真507



写真508



写真509



写真510



写真511



写真512



写真513



写真514



写真515



写真516



写真517

③：四股立ちの姿勢からさらに沈み、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。次いで太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、四股立ちの姿勢で、撥先で地を2回叩き、上体を引き立て、左足の踵を外側に押し出し、右足を引きながら右側を向く。(写真505～517)



写真518



写真519



写真520



写真521



写真522



写真523

④：左足の踵を内側に押し出し、右足、左足と踏み、左側を向き、太鼓を打つ仕草と共に沈む。  
(写真518～523)



写真524



写真525

⑤：左足の踵を外側に押し出し、右足を引くことで正面を向く。(写真524・525)

⑥：①②③④を行う。

●つなぎ



写真526



写真527



写真528



写真529



写真530



写真531

・笛の「ピッ」で正面を向きながら、撥の房が上になるように持ち変える。(写真526～531)

●ほねなし



写真532



写真533



写真534



写真535



写真536



写真537



写真538



写真539

①:膝を緩め、脇張りの状態で肩幅に立ち、上体を起こしながら撥先を天に向け、右足前半身になりながら、右足つま先方向に枝垂れ、揺れに身を任せる。右に枝垂れた上体を正面に戻し、さらに上体を起こしながら脇張りの状態で撥先を天に向け、右足前半身になりながら、右足つま先方向に枝垂れ、揺れに身を任せる。(写真532～539)



写真540



写真541



写真542



写真543



写真544



写真545





写真546



写真547

②: 正面に対し上体を起こしながら撥先を天に向け、左足前半身になりながら、左足つま先方向に枝垂れ、揺れに身を任せる。右に枝垂れた上体を正面に戻し、さらに上体を起こしながら脇張りの状態で撥先を天に向け、左足前半身になりながら、左足つま先方向に枝垂れ、揺れに身を任せる。(写真540～547)



写真548



写真549



写真550



写真551



写真552

③: 撥を元の握りに持ち変え、脇張りの状態で肩幅に戻り、左足の踵を外側に押し出ししながら右足を左足後方に引き、右側を向き、左足前半身から右足前半身に移行。(写真548～552)



写真553



写真554



写真555

④: 太鼓を打つ仕草と共にねじりで左側を向き、脇張りの状態で肩幅に戻る。(写真553～555)



写真556



写真557

⑤: 右足前半身から左足前半身に移行。(写真556・557)



写真558



写真559



写真560



写真561



写真562



写真563



写真564



写真565



写真566



写真567



写真568



写真569



写真570



写真571



写真572



写真573

⑥: 太鼓を打つ仕草と共にねじりで正面を向き、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。次いで太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、四股立ちの姿勢で、撥先で地を2回叩き、上体を引き立て、さらに地を2回叩く。(写真558～573)



写真574



写真575



写真576



写真577



写真578



写真579



写真580



写真581



写真582



写真583



写真584



写真585



写真586



写真587



写真588



写真589



写真590



写真591



写真592



写真593

- ⑦: 太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。次いで太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、四股立ちの姿勢で、撥先で地を2回叩き、上体を引き立て、さらに地を2回叩く。続けて上体を引き立て、地を4回叩く。(写真574～593)



写真594



写真595



写真596



写真597



写真598



写真599



写真600



写真601



写真602



写真603



写真604



写真605



写真606



写真607



写真608



写真609



写真610



写真611



写真612



写真613



写真614



写真615



写真616



写真617

⑧：太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。次いで太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、左足の踵を外側に押し出しながら着地し、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げ、右側を向く。太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、左足の踵を内側に押し出しながら着地し、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げ、左側を向く。太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、左足の踵を外側に押し出しながら着地し、太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げ、正面を向き、沈む。(写真594～617)



写真618





写真619



写真620



写真621



写真622



写真623



写真624



写真625



写真626



写真627



写真628



写真629



写真630



写真631



写真632

⑨：太鼓を打つ仕草と共に左足を踏むことで右足を上げる。太鼓を打つ仕草と共に右足を踏むことで左足を上げ、右足で4回踏み浮く。この際、目線および両撥は天を指す。その後、四股立ちの姿勢で、撥先を地に下す。(写真618～632)

#### ●つなぎ



写真633



写真634



写真635

・笛の長めの「ピ————」で肩幅に立ち上がり、右足の踵を外側に押し出し、右足に乗ることで退場方向を向く。(写真633～635)

#### ●道行き（退場）

・動作は入場時と同じ。

#### おわりに —まとめと今後の課題—

初めに、この研究は「現在の別所三頭獅子との比較をするものではない」ことを申しあげておく。

本論は別所三頭獅子を素材に、身体感覚教育論の視点から9つの和の身体技法に立脚し、別所三頭獅子発生当初の動きを探り、和の身体技法テキストとしての教材開発を目的としたものである。

今回のテキスト作成で明らかになったことは、本論をテキストに別所三頭獅子を知らない和太鼓サークル「和（NAGI）」の学生数名に文章を読みながら

言葉のみで動いてもらった結果、筆者の意図する動きが再現されたことから、本論をテキストとして活用し説明文と写真を合わせながら動作することで、9つの和の身体技法と別所三頭獅子が同時に学べるものに仕上がっていると言える。

様々な身体感覚を普段の生活から身につける機会が減少している現状を考えると、和の身体技法を日本人の伝統技として伝承することは重要なことである。斎藤（2000）は「重要なのは、『身体感覚の技化（わざか）』ということである。身体感覚は、通常は何かの刺激に対して反応する一回性のものだと考えられがちである。しかし、身体感覚も文化的なものであり、習慣によって形成されるものである。腰や肚に関する感覚はその典型であり、生活の中で何度も訓練され、身につけた一つの技である。（中略）身体感覚は、気持ち良さを感じる方向へ身体を解放する文脈で語られることが多い。この文脈では、身体感覚は訓練されたり技にされるものではない。しかし、『身体感覚を技化する』という考え方をすることによって、一回一回の身体感覚に流れていくのではない方向性が見えてくる。身体感覚が技となって身につくことで、より確かな充実感が得られる可能性が生まれるのである。」という<sup>122)</sup> 伝統的郷土芸能が9つの和の身体技法で構成されていることはすでに指摘したが、日本人の伝統技としての身体感覚を、伝統的郷土芸能に投映し伝えることは「和の身体技法」を伝承する有効な手段でもある。さらに斎藤（2000）は「三世代ほどをかけて衰退するに任せてしまった伝統的な身体感覚を、ねらいを絞って意識的に伝承する必要があるのである。」という<sup>123)</sup>。普段の生活では身につけ難くなりつつある現状において、和の身体技法を伝承する場を学校にねらいを絞ることと解釈すれば、テキストとしての教材開発は失われつつある伝承されるべき身体技法の定着と、伝統的郷土芸能の指導者不足の一助になることが望めるであろう。

今後に向けて、学校教育のカリキュラム化を視野に入れた課題の一つは、前述した和太鼓サークル「和（NAGI）」の学生はすでに伝統的郷土芸能を数演目演ずることができることから、比較的容易に動きを再現できたとも考えられるため、伝統的郷土芸能も身体技法も知らない学生達に本テキストを活用し、どのように和の身体技法を伝えるか実践の中で実証していくことである。さらに本学で取り扱っている

教材としての伝統的郷土芸能<sup>124)</sup>の分析と和の身体技法テキスト化が当面の課題である。

謝辞：本論文作成にあたっては、多くの方々のお世話になっている。岳の幟保存会会長・別所神社総代長松崎良人さん、岳の会会長 竹内博敏さん、岳の幟保存会会員 増沢孝徳さん、同会会員 宮原章典さん、岳の会会員 山極透さん、別所三頭獅子岳の会の方々、そして2019年度長野大学卒業生の遠山実月さん、野口侑美さん、村山広樹さん、山崎美和さん、涌井美久里さん、ほか長野大学和太鼓サークル「和（NAGI）」のみなさん。このほか名前を挙げられない方々の多大なるご協力のもとで作成された。ここに記して深く感謝申し上げる。

## 注

- 1) 松田和彦「地域文化資源の身体感覚教育論の視点からの分析 - 信州上田下之郷三頭獅子舞保存会の事例を中心に -」『長野大学紀要』第39巻 第3号（通巻141号）2018年、54頁。
- 2) 斎藤孝『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会、2000年、34頁。
- 3) 木下竹次『学習原論』明治図書出版、2000年、3月、191頁。
- 4) 斎藤孝『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会、2000年、246頁。
- 5) 岳の幟について斎藤龍童（1976）は「この『岳の幟祭』は、もとは雨乞いの神事から発しているとされている。明治初期に集成した『長野県町村誌』には、その伝承を、『永正元年（一五〇四年）夏早す。三柱の神（九頭龍神）男神岳上に祭り、雨を祈る。雨降ること三日。凶事を免れたるによって旗を獻<sup>けん</sup>ず。毎年七月十五日にその式を行う。（中略）太平洋戦争中、九頭龍にノボリ二本だけを納めたのが最小で、決して断絶することなく今日まで続いている。この祭りに対する別所の人々の心意気がしのばれ様というものである。」という。斎藤龍童『信州・別所古代を探る』龍文社、1976年、213頁、214頁。また『岳の幟の祭礼調査報告書』

(1982) には「上田市別所温泉の岳の幟の祭礼は、永正元年(1504年)の大旱魃の折以来、五百年近くに亘って連綿と受け継がれて来ました。この祭礼はひでりの時に降雨を神仏に祈念した雨乞いの行事であり、全国でも最も降雨量の少ない地域の一つである塩田平の人々の、雨に対する切実な願いがこめられていて、極めて貴重な無形文化財といえます。昭和44年6月には、保野祇園祭とともに上田市の無形文化財に指定されました。」という記述がある。長野県上田市『上田市文化財調査報告書 第19集 岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、1982年、1頁。『上田市の文化財』(1999) には「塩田平の西辺に位置する別所温泉地区には、『岳の幟』と呼ぶ雨乞いの祭が伝わっています。この塩田地方は昔から水不足で大変悩まされてきた所で、灌漑用の溜池も多く造られ、雨乞い行事もいろいろ行われてきました。言い伝えによると、室町時代の永正年間(十六世紀はじめ)に大きなひでりが続いて、水は涸れ作物はほとんど緑を失ってしまう有様に、村人は村の西にそびえる夫神岳(標高二五〇m)の山の神様に雨乞いの祈願をしたところ、恵の雨が降り作物がよみがえりました。喜んだ村人はそのお礼として、夫神岳の山頂に祠を建て九頭龍神をお祀りして、毎年各家で織った布を奉納し、感謝と祈願をしたのが初めとされています。」という記述がある。上田市誌編さん委員会編『上田市の文化財』(上田市誌文化財編) 上田市誌刊行会、1999年、182頁。さらに小林(2006)は「岳の幟 上田盆地は、年間降水量が一〇〇〇ミリ前後の寡雨地帯で、塩田平では多くの溜池を造って灌漑が行われています。この寡雨地帯は、永正元年(一五〇四)夏に未曾有の大旱魃に見舞われ、村人達は夫神岳(一二五〇・一メートル)の山頂に社を健立して雨乞いを祈願したところ、九頭龍神の加護によって三日間に渡って降雨があり、災厄を免れたと伝えられています。村人は、そのお礼に笹のついた青竹に三丈余(約九メートル)の布を垂れ下げ、夫神岳に登って九頭龍神に献納し、山を下って温泉街を練り、最後は別所神社に奉納しています。この行事は、「岳の幟」と呼ばれ、国の選択無形民俗文化財

に指定され、平成十六年(二〇〇四)夏には「岳の幟五百年祭」が盛大に行われました。(中略)一九九八年に開催された長野冬季オリンピックの閉会式にも参加して広く知られるようになりました。」という。小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』信濃毎日新聞社 2006年、114頁、115頁、141頁。

- 6) 重要無形文化財に指定されていないが、我が国の芸能や工芸技術の変遷を知る上で重要であり、記録作成や公開等を行う必要がある無形の文化財について「記録作成等の処置を講ずべき無形文化財」として選択し、国が自ら記録作成を行ったり、地方公共団体が行う記録作成や公開事業に対して助成を行っている。
- 7) 写真1(選択書)(撮影者 遠山実月長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生。)撮影日 2019年 12月1日。
- 8) 松田和彦「地域文化資源の身体感覚教育論の視点からの分析 - 信州上田下之郷三頭獅子舞保存会の事例を中心に -」『長野大学紀要』 第39巻 第3号(通巻141号) 2018年、53頁、54頁、62頁。
- 9) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』 2006年、110頁。
- 10) 図1(旧上田地区三頭獅子分布図) 遠山実月(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 11) 取材日2019年12月1日。
- 12) 取材日2019年12月1日。
- 13) 取材日2019年12月1日。
- 14) 取材日2019年12月13日。
- 15) 取材日2019年12月1日。
- 16) 参加日2017年7月16日、2019年7月14日。
- 17) 上田市誌編さん委員会編『上田市の文化財』(上田市誌文化財編) 上田市誌刊行会、1999年、183頁。
- 18) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』 2006年、143頁。
- 19) 取材日2019年12月1日。
- 20) 取材日2019年12月1日。
- 21) 取材日2019年12月1日。
- 22) 取材日2019年12月13日。
- 23) 齋藤龍童『信州・別所の古代を探る』 龍文社

- 1976年、214頁。
- 24) 長野県上田市(上田市文化財調査報告書 第19集)『岳の幟の祭礼調査報告書』上田市教育委員会、1982年、15頁。
- 25) 上田市誌編さん委員会編『上田市の文化財』(上田市誌文化財編)上田市誌刊行会、1999年、182頁。
- 26) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』信濃毎日新聞社、2006年142、143頁。
- 27) 宮本達郎『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』塩田平文化財保護協会、2013年3月31日、8頁。
- 28) 取材日2019年12月1日。
- 29) 取材日2019年12月13日。
- 30) 上田市文化財調査報告書 第19集『岳の幟の祭礼調査報告書』上田市教育委員会、5頁。
- 31) 上田市誌編さん委員会編『上田市の文化財』(上田市誌文化財編)上田市誌刊行会、1999年、183頁。
- 32) 取材日 2019年 12月 1日。
- 33) 取材日 2019年12月13日。
- 34) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 35) 笹原亮二「三匹獅子舞の分布」『国立民族学博物館研究報告』第26巻、第2号、2001年、211頁。
- 36) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』2006年、110頁。
- 37) 取材日 2019年12月1日。
- 38) 取材日2019年12月13日。
- 39) 上田市文化財調査報告書 第19集『岳の幟の祭礼調査報告書』上田市教育委員会、16頁。
- 40) 上田市文化財調査報告書 第19集『岳の幟の祭礼調査報告書』上田市教育委員会、21頁。
- 41) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』2006年、143頁。
- 42) 取材日2019年12月1日。
- 43) 取材日2019年12月13日。
- 44) 上田市文化財調査報告書 第19集『岳の幟の祭礼調査報告書』上田市教育委員会、21頁、22頁。
- 45) 取材日2019年12月13日。
- 46) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 47) 図2(岳の幟における別所三頭獅子行列順) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 48) 宮本達郎『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』2013年3月31日、8頁。
- 49) 取材日2019年12月1日。
- 50) 祭事実行委員長 松崎良人『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼(515年前発祥) 実施要領』2019年7月14日、9頁。
- 51) 取材日2019年12月13日。
- 52) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 53) 上田市誌編さん委員会編『信仰と芸能』(上田市誌 民族編(3))上田市誌刊行会、2002年、138頁。
- 54) 宮本達郎『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』2013年3月31日、8頁、9頁。
- 55) 祭事実行委員長 松崎良人『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼(515年前発祥) 実施要領』2019年7月14日、8頁。
- 56) 取材日2019年12月1日。
- 57) 取材日2019年12月13日。
- 58) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 59) 図3(扮装・捕物図解)松田和彦監修・山崎美和(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生)編集、作画。
- 60) 写真2〜7 撮影者 遠山実月(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 撮影日2020年2月8日。
- 61) 写真 8) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 62) 写真 9) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 63) 写真10) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 64) 写真11) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 65) 写真12) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 66) 写真13) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 67) 写真14〜17) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 68) 写真18) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 69) 写真19) 撮影者 遠山実月(同上) 撮影日2020年2月8日。
- 70) 写真20・21 撮影者 遠山実月(同上) 撮影

- 日2020年2月8日。
- 71) 背中腰にさす御幣はその都度作り直すため、現物は見当たらなかった。
- 72) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、22頁、23頁。
- 73) 上田市の文化財 『上田市誌 文化財編(27)』、183頁。
- 74) 取材日2019年12月13日。
- 75) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』2006年、144頁。
- 76) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、24頁、25頁。
- 77) 取材日2019年12月13日。
- 78) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 79) 取材日2019年12月13日。
- 80) 後世に伝承するためにあえて意味付けをしたと考えられる。竹内博敏氏の伝承者としての熱意と姿勢に敬意を表する。
- 81) 取材日2019年12月13日 筆者が岳の幟を見学时、別所三頭獅子が踊られると晴天であるにも関わらず雨が降り、別所は天と地が繋がっているのではないかという場面を何度か体験している。「神のご加護だと思います」と言える別所の住民が、この伝統を大切に伝えようとしている熱意は確実に伝わってくる。
- 82) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、25頁。
- 83) 図4(基本の置図) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 84) 取材日2019年12月13日。
- 85) 図5(踊りの配置図) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 86) 図6(踊りの配置図) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 87) 図7(踊りの配置図) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 88) 図8(踊りの配置図) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 89) 図9(踊りの配置図) 涌井美久里(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 90) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 91) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、22頁、23頁。
- 92) 取材日2019年12月13日。
- 93) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、16頁。
- 94) 取材日2019年12月13日。
- 95) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、22頁。
- 96) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、30頁。
- 97) 取材日2019年12月13日。
- 98) 筆者が2019年7月14日当日現場にて確認。
- 99) 採譜・編集 村山広樹、遠山実月、山崎美和(長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生)
- 100) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、40頁～46頁。  
『岳の幟の祭礼調査報告書』に記載されている楽譜と、2017年の別所神社奉納時の演奏を採譜し楽譜化したものと比較すると、『岳の幟の祭礼調査報告書』に記載されている楽譜では特に「岡崎」での脚色が多く見られる。楽譜上の○印、□で囲った部分は2017年との相違である。筆者の想像ではあるが、生活文化の変化から来る動作や生活リズムの違いであろうと思われる。(楽譜掲載P116～P122)
- 101) 取材日2019年12月13日。
- 102) 上田市誌編さん委員会編『上田市の文化財』(上田市誌文化財編) 上田市誌刊行会、1999年、183頁。103) 取材日2019年12月13日。
- 104) 見学日2019年7月14日。
- 105) 取材日2019年12月13日。
- 106) 小林幹男『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』信濃毎日新聞、2006年、110頁。
- 107) 取材日2019年12月13日。
- 108) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、1982年、7頁。
- 109) 上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、7頁、24頁、25頁、26頁。
- 110) 取材日2019年12月13日。
- 111) 松田和彦「地域文化資源の身体感覚教育論の視点からの分析 - 信州上田下之郷三頭獅子舞

- 保存会の事例を中心に -」『長野大学紀要』 第39巻 第3号 (通巻141号)、2018年3月25日、63頁、64頁。
- 112) 図10 (和の身体技法の定義) 野口侑美 (長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 監修。
- 113) ⑤かじりの動作再現で説明する。
- 114) 写真モデル 村山広樹 (長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生 和太鼓サークル「和 (NAGI)」元部長 (入学当初より各地の伝統的郷土芸能を学び、和太鼓サークル「和 (NAGI)」創設者の一人。和の身体技法を取り入れた表現は高い評価を得ている。) 撮影者 遠山実月 (長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生) 撮影日 2020年2月28日、3月6日、3月13日。
- 115) 撮影日2017年7月16日 (日)、撮影者 遠山実月 (長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生)。
- 116) 長野大学和太鼓サークル「和 (NAGI)」は長野大学「身体パフォーマンス日本の踊り、太鼓」の授業を2017年4月～7月の間受講した2019年度卒業生たちの手で、2017年9月に日本各地に伝わる伝統的な郷土芸能を研究するグループとして立ち上げられた。同サークルは自主公演を含め各地の祭り、企業の行事などに招待され、同サークルの公演数は年間約20回に及び、和の身体技法をベースにし演技には定評がある。
- 117) 撮影日2020年2月28日、3月6日、3月13日、撮影者 遠山実月 (長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生)。
- 118) 長野大学リポジトリ [nagano.repo.nii.ac.jp](http://nagano.repo.nii.ac.jp)を参照。
- 119) 図11編集 涌井美久里 (長野大学環境ツーリズム学部2019年度卒業生)。
- 120) 写真225は実際に進行方向を向いた姿である。写真226は写真225を正面から見た姿である。
- 121) 本来円の外側へ枝垂れるが、動きが見え難いため正面で撮影した。
- 122) 斎藤孝『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会、2000年8月30日、6頁、7頁。
- 123) 斎藤孝『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会、2000年8月30日、246頁。
- 124) 神奈川県 ぶち合わせ太鼓／埼玉県 秩父屋台囃子／東京都三宅島 神着木遣り太鼓／東京都八丈島 八丈太鼓／秋田県 秋田竿灯囃子／北海道 ソーラン節／青森県 大川平荒馬／岩手県 朴の木沢念仏剣舞／岩手県 岩崎鬼剣舞。

## 引用文献一覧

- ・上田市文化財調査報告書 第19集 『岳の幟の祭礼調査報告書』 上田市教育委員会、1982年。
- ・上田市誌編さん委員会編『上田市の文化財』 (上田市誌文化財編) 上田市誌刊行会、1999年。
- ・上田市誌編さん委員会編『信仰と芸能』 (上田市誌民族編 (3)) 上田市誌刊行会、2002年。
- ・木下竹次『学習原論』明治図書出版、2000年。
- ・小林幹雄『祈りの芸能 信濃の獅子舞と神楽』信濃毎日新聞社、2006年。
- ・祭事実行委員長 松崎良人『令和元年 別所温泉 第516回 岳の幟祭礼 (515年前発祥) 実施要領』、2019年。
- ・斎藤孝『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会、2000年。
- ・齋藤龍童『信州・別所古代を探る』龍文社、1976年。
- ・笹原亮二「三匹獅子舞の分布」『国立民族学博物館研究報告』第26巻、第2号、2001年。
- ・文化庁ホームページ 無形文化財 <https://www.bunka.go.jp/> (参照 2020. 1. 21)。
- ・松田和彦「地域文化資源の身体感覚教育論の視点からの分析 - 信州上田下之郷三頭獅子舞保存会の事例を中心に -」『長野大学紀要』 第39巻 第3号 (通巻141号)、2018年3月25日。
- ・宮本達郎『別所・保野・東前山の市神 奈良尾の薬師』塩田平文化財保護協会、2013年。

別所、岳の幟

三頭獅子の楽譜

♩=約84 1. 道行 楽譜の変更点 足しかな音 譜⑦

2. 振込み 譜⑧



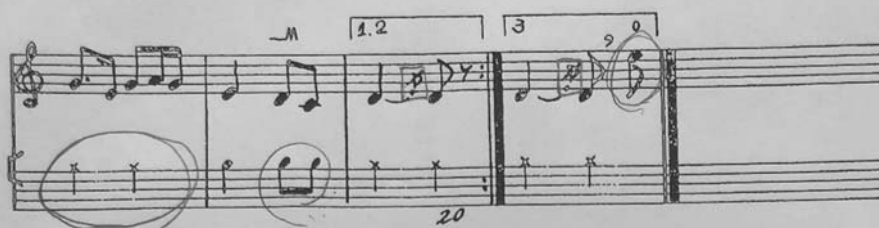
② 注... は太鼓手による掛声

### 3. 舞 込 み (3回) 譜-④

$\text{♩} = \text{約 } 92$

*meno mosso*,  $\text{♩} = \text{約 } 88$

*M*



(※記)  $\begin{smallmatrix} \times & \times \\ \times & \times \end{smallmatrix}$  は太鼓手の掛声を示す。

4

舞

譜-10

♩ = 87/92



5. かじり

(A) ♩ = 約 84

♪ (B) ♩ = 約 96

譜①

ゆっり

せきさんか

ゆっり

5

10

15

20

(C-1)

25

30

35

hid...

- 48 -

Handwritten musical score for a piece, likely a piano sonata, featuring six systems of staves with treble and bass clefs. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings. Key annotations include:

- System 1:  $(A') D = \sharp 976$ ,  $(C-2) D = \sharp 996$
- System 2:  $(D)$
- System 3:  $(A') D = \sharp 984$ ,  $(C-3) D = \sharp 976$
- System 4:  $(D)$

There are also circled sections and a "rit." marking.

The musical score is handwritten and consists of six systems of two staves each. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and dynamic markings. Handwritten annotations in Japanese and English are present throughout the score.

- System 1:** Treble staff starts with a half note, followed by a quarter note, and then a series of eighth notes. Bass staff has a half note and a quarter note. Handwritten:  $(A')$ ,  $D=5/80$ ,  $75$ .
- System 2:** Treble staff has a half note, followed by a quarter note, and then a series of eighth notes. Bass staff has a half note and a quarter note. Handwritten:  $(C4)$ ,  $D=5/96$ ,  $80$ .
- System 3:** Treble staff has a half note, followed by a quarter note, and then a series of eighth notes. Bass staff has a half note and a quarter note. Handwritten:  $85$ ,  $90$ , *molto 1:5*.
- System 4:** Treble staff starts with a half note, followed by a quarter note, and then a series of eighth notes. Bass staff has a half note and a quarter note. Handwritten:  $(A')$ ,  $D=5/80$ ,  $(C5)$ ,  $D=5/96$ ,  $95$ .
- System 5:** Treble staff has a half note, followed by a quarter note, and then a series of eighth notes. Bass staff has a half note and a quarter note. Handwritten:  $100$ .
- System 6:** Treble staff has a half note, followed by a quarter note, and then a series of eighth notes. Bass staff has a half note and a quarter note. Handwritten:  $105$ .

At the bottom of the page, there is a handwritten note in Japanese: 最後にもう一小節つけ足す (Add one more measure at the end).

♩ = 約96 6. 岡崎 譜⑬

7. 骨なし 譜⑭

♩ = 約80

ゆきやうく

♩ = 104

りぞめんく

15

rib

20

- 46 -